63-39

二宮尊德

終篇

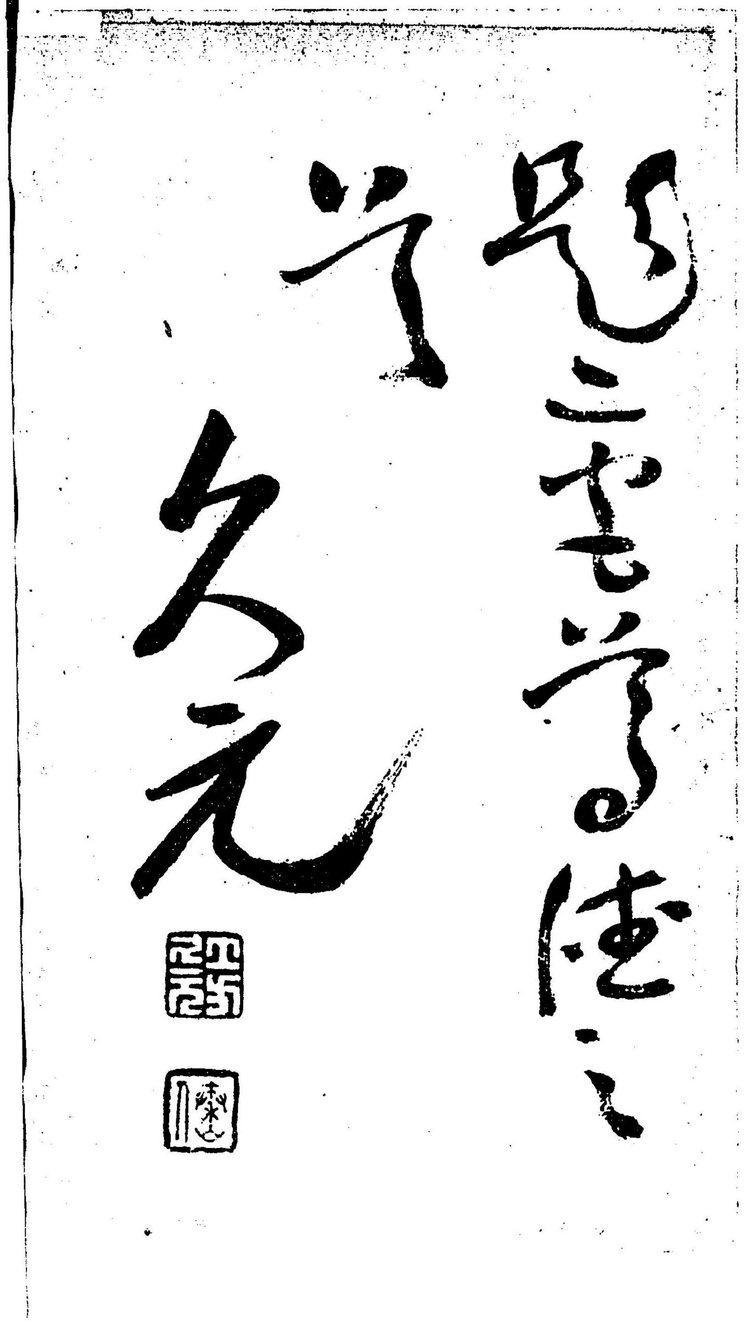
興風叢書第二卷

前宮內大臣　土方秦山伯題辭
家庭學校長　留岡幸助君閲
碧瑠璃園君作
渡部審也君裝畫

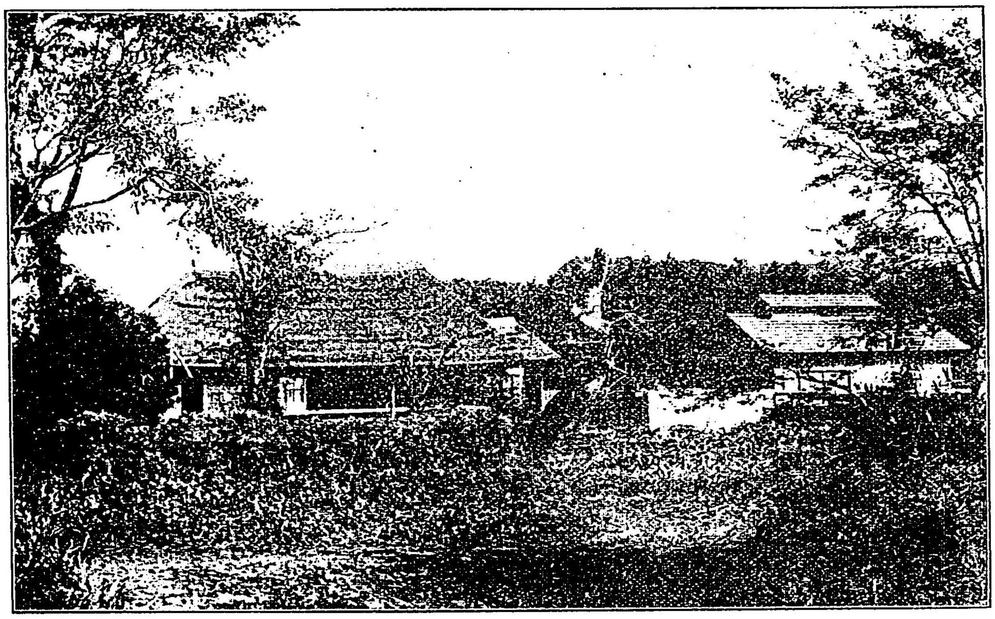
明治
43. 1. 22
內交

元亨
鑑見

孫徒不


學陸
久元

この書は二宮翁の自筆にして翁三十七歳の時（文政六年）大久保公の命に依り野州櫻町宇津釈之助の采邑高四千石の地を恢復せんとし赴任に先ち先づ自己に属する家財諸道具一切を賣却して其賣本に加へたるもの實に稀有なる特志行爲と云ふべし



櫻町の舊陣屋殘存せる

英昭

事天の行爲

俗謡に「箱根八里は馬でも越すが馬で越されぬ大井川」と云へり、其の如く人と人との上は智力にても、辯舌にても威權にても通らぬ通るべけれど、天あるを如何せん。智力にても辯舌にても威權にても決して通る事の出來ぬは天なり。然れば恐るべきは天なり、勤むべきは事天の行爲なり。世の強欲者此理を知らず何處までも際限なく身代を大にせんとして、智を振ひ腕を振ふと雖も、種々の手段ひ起りて進むこと能はず。又權謀威力を頼んで專ら利を計るも、同じく失敗のみありて志を遂ぐる事能はざるは、皆天あるが故なり。

（翁の訓言）

二宮尊德 終編

碧瑠璃園

第一章

（一）

「唐木村の興復成りし後の尊德は、その勢力更に加はりぬ、その威望更に加はりぬ、その名聲更に廣く天下に布きぬ、櫻町の陣屋は門前常に市を作しぬ、尊德は何日も變らぬ日課を繰り返して、報德主義の皷吹に勉めぬ、彼の勢力は倫を絶ちぬ、彼の道德は太陽の如く此あたりの人心を遍照したりき

「先生へ伺ひまする」と次の間に膝を進めしは近頃入門せる福住正兄なりき

「報德では何ういふ所が一番難しうございまするな」

「苦しい時にはどんな事でも守るが、少し樂になると忽ち忘れる、是が普通の人情、然も報德の難關はこゝにある」と尊德はすぐ答へぬ

「先生へ伺ひまする」と次に聲を掛けしは兼吉なり「先生のお歌に、飯と汁、木綿着物は身をたすく、其餘は我を責ひるなりけり、といふのがございます、彼の歌の心は何ういふのでございまするな」

「兼吉好い事を聞くの」と尊德は機嫌克く「その歌の中に儉約の心が讀み込んである、世の中の人は兎もすると、儉約と吝嗇とを混同にするが、この間に自然差別がある、例へば一升米の要る家で一升食ふのは當然、一升一合食ふのは奢侈で、九合食ふのが吝嗇ぢや、そこで飯と汁、木綿衣服は人間生活最大の必要品、その他の物は生活の補助に爲らいで、兎もすると身を責める仇となる、儉約は仇を近けぬ處に理窟があるが、吝嗇は前にそれを防いで、背後にそれを近づけることになる、此邊を熟く味ふぢや」

兼吉は唯々として引き退く、その次に進み出でしは富田高慶なり

「私も先生に隨身してから、もう是れ三年近くにもなります、毎日報德の御講義を承はるので、自らも多少の發明があるやうに信じます、由て少しも早く國家のお爲めに爲ることを圖うと心掛け居りまするが、何故私はこの樣に病身でございませう、家國の爲めに心を盡さうと期して居る者には、天道も少し位お手加減を爲されて宜しからうと心得ます」

「宛ら天を恨むが如く云ひき、その身に病多きが爲め、報德の主意を十分に弘通すること能はざるべきを嘆くが如く云ひき、尊德は自ら高ぶりて他を恨ひを憎まれき、苦々しげに

「お前は鼠を知つて居るかの」

「存じて居ります」

「彼奴戸棚を嚙り、天井に穴を開け、大切な器具帳簿を食ひ散らして、夜の目も寐ずに働いて居る、人間から見ると、隨分迷惑至極な話ぢやが、鼠の身から云たら、懸命の仕事をして居るのかも知れぬ、お前は恰ど鼠ぢやよ」

「私が……」と高慶は良色を作して「鼠と仰せござりまするか」

「天から御覽なされたら、恰ど鼠の樣なものかも知れぬ、お前は國家の爲めに一廉力を盡すつもりで居るか知らぬが、天道からは御迷惑に思し召してお在かも知れぬぞよ」

一語眞に千鈞の力ありき、流石の高慢も返す詞なく、火の如くになりてし垂頭く、折柄出で來りしは執次の萬兵衛なり

「先生又仕法が來ました、今度は坊さんでございます」

「又來たか」

「坊主でございます」

「乃公は坊主は大嫌ひぢや、何といふ」

「野州那須郡烏山天性寺の住職圓應と申します」

「烏山は小田原公御分家、大久保佐渡守樣御領地ぢや、その坊主何の用がある」

「例の仕法でございます、烏山三萬石の領地が、日ごとに衰へて行きますゆゑ、先生のお手を借りて仕法を付けたいと願ふのでございます」

「坊主の分際で、怪しからぬことを云ふ、對面はならぬと云へ」

その聲破鐘の鳴る如き懲きなりき、萬兵衛は驚きて座を起たんとす

「待て〳〵」と尊德は又呼び止め「相手が坊主なりや、分るやうに云うて遣らねばならぬ、そなた、乃公の云ふ處をよく聞いて行け」

萬兵衛はおづ〳〵と進み出る、留吉は側より口を挿みて

「先生お聞き及びではございませぬか、天性寺圓應和尚は、その邊までも名の聞こえた大學者でございます、大學者ばかりでは無い、氣象の確な名僧でございます」

「いかに名僧でも乃公は關はぬ、未來や學問で村の仕法は付かぬでのう」

(二)

圓應は五十の坂を三あまりも超えたる老僧なりき、墨染の法衣、錦襴の袈裟、手には水晶の珠數を爪繰り、足には朴の木齒の高足駄を穿きて、陣屋の式臺に腰掛け居たりき、脊は高く、肉痩せて、凹みたる眼の光り、谷間の底の水清く、大天の月を宿したるが如く明かなりき

萬兵衛は嚴正らしく出で來る

「和尚樣お待たせ申して濟みませぬ」

「お執次御苦勞でござつた、先生お逢ひ下さるかの」

「處が些と難しうございます」

「お逢ひ下さらぬかな」

「和尚樣御口上は、詳しく申し上げてございまするが、先生一向お取上げでございませぬ、御出家は御出家の務めがある、自分の務めを捨て置いて、興國安民の法を行はせうなど、第一にその意を得ぬ、速かに御退去あらせらるゝがお身のお爲めでござらうとのお詞でございます」

「左樣か、先生御返答は左樣であつたか」と圓應は慚きたる樣もなく「それは御有理ぢや、御有理のお詞ぢや、然し先生その一を知つてその二を御存じあらせられぬ、恐僧佛家の出ではござるが、其志は民の心を安んずるにある、先生日頃の御仕法を承はつて、誠心からお慕ひ申し上げる、お目に掛れば巨細に申し上げるが、烏山三萬石の御領内、民百姓は惰弱に流れ、風俗は次第に廢る、夫が爲め戸數は減り、田地田圃は荒れ蕪み、良民は皆な飢渴に迫る、その樣實際目も當てられぬ、出家の身が見るに見かねゝ、遙々先生の御陣屋へ

參つたは、先生のお力に由て諸民の難澁を救はうと存ずるからぢや」

「御有理でございます」と萬兵衛は心から同情して「和尚樣さぞお骨の折れる事でございませうな」

「恐僧骨の折れる事は少しも厭はぬが、まだ一向に德が足らいで御領内の民百姓を撫育する力の無いのを耻づる、どうあつても先生にお目に掛つて、御高說を承はらうと思ふが、急にお許しはあるまいかの」

「先生は一たん云ひ出したことを、後へお退きなさるお方ではございませぬ、日を改めてお入來なさるとも、今日はお歸りなさるがよくはございませぬかの」

「お手前の親切は有難いが、恐僧好い年をして態々當地へ參りながら、先生のお目通りも許されず、阿容々々歸る顏はない、假へ御門前で餓死するとも、先生御機嫌の治るまで待つ心ぢや、今一應お取次ぎ下されまいか」

その熱心は面に現はれぬ、凹みたる眼の底には一雫の露も見えぬ、されど萬兵衛は尊德の心の動し難きを知りて

「幾度申し上げても同じ事、今日の處はお諦めが好からうと存じます」

「心は諦めても目が承知を致さぬ、烏山へ歸つて、手を空しく幾百千人の餓死を見るに忍びぬ、平にお手前御芳志にお縋り申す、こゝで先生お心をお柔げ下さるのは、取も直さず烏山三萬石に新らしい命をお授け下さるも同樣ぢや、切にお願ひ申す」

「さて困つた事仰せ、幾度申し上げても同じ事でござるがな」

「其處をお手前御口上で、先生御納得あるやうに申し上げ下さるぢや」と圓應は動ぜず「平に賴み入る、これぢや〳〵」と珠數持ちし手をぴたりと合せぬ

「どうして好いか、私も途方に暮れるでござりまするな」と萬兵衛は頭を掻きつゝ「お賴みはござりませいでも、十數年前の當村に覺えもある、切ては御對面だけでもあらするやうと存じ、段々お願ひ申してござりまするが、末には殊の外御立腹、乃公には乃公の務めがある、當村の回復まだ十分といふでもないに、何とて他領の仕法付ける暇があらう、烏山の安危は御領主佐渡守樣思し召しにあることぢや、乃公の知つたことではない、殊に出家の身として乃公の仕事を妨ぐる、何とも不屆至極の奴ぢや、すぐ追ひ返せと、斯樣の仰せ、今は取り付く島もござりませぬぢや」

「左樣か」と圓應は始めて失望の聲を漏らし「先生さほど御立腹か」

「由つて何事を申し上げても、お取上げはあるまいと存じられます」

「先生のお身體は櫻町四千石の安危に關り、恐僧の進退は烏山三萬石の人命に關する、此上は止むを得ぬ、御門前に餓ゑ死んで領内百姓の爲冥途の先導をするであらうぞ」と覺悟の樣を面に見せて「慮外ながら御門前を借用致す

(三)

翌日は秋雨淋しく降りしが、その翌日はさらりと晴れて、小春日和に蝶も舞ふらん景色なりき、尊德は朝の巳刻村内の巡視を終て歸り來る、諸門人百姓みな玄關に出迎へて、尊德の奥の間に入るに從ふ、尊德は例の一間に座を占めて

「萬兵衛に尋ぬる、昨日はしと〳〵と雨の降る中、今日は又朝日長閑に照り渡る下、門前の芝生に坊主が寐て居る、何者ぢや」

「彼が烏山の圓應和尚でござります、先生のお目に掛ることが能きずば、こを借用して餓死すると申し張り、先日以來芝生の上に寐て居ります」

「言語同斷、怪しからぬ坊主ぢや」と尊德は不快の樣

「彼の風體、お目に止つては可くないと存じ、退去致すやう幾度も申し聞けてござりまするが、和尚一向に聞き入れませぬ、正しう命を捨てる覺悟と思はれます」

「重ね〳〵不埒な奴、强て面會を申し込ひさへあるに、門前に餓死して百姓が冥途の案內を致さうなどゝは、捨て置かれぬ曲者、諾し逢うて遣る、これへ伴れて參れ」

「先生御對面でござりまするか喃」

「逢うてよく誡め遣る、匆々伴れて參れ」

萬兵衛は尊德の樣の常ならぬに肝を消しつゝ、門前へ駈け出で見れば、午時前の秋の日影、春の日よりも長閑に照りて、芝生の中に交り咲く世顏の蔓、圓應の法衣の端に這ひかゝる

圓應は袈裟法衣の儘なりき、手に珠數を掛けたる儘なりき、小さき樹の根を枕として、すや〳〵と眠りに入れる儘なりき

「天性寺樣々々々、お目をお覺ましなされませ」

萬兵衛は呼びたれど、圓應は答へなかりき、彼は如何なる人の諫をも肯かず、こゝに餓死せん覺悟の臍を堅めたりき

「もし和尚樣、先生がお目に掛ると云はれます、早うお目をお覺しなされませ」

此聲耳に入ると共に、圓應は俄破と刎ね起きぬ、露に濕りたる法衣の袖を拂ひながら

「先生お逢ひ下さるか」

「お居間へお伴れ申せとのお詞でござります」

「さらば案內爲、すぐ參る」

彼は絶食の疲勞をも意とせざりき、萬兵衛の伴ふに任せて、徐々と奥の一間に通る

尊德は正面に坐りてありき、木綿縞の袷衣の袖より、美はしき光の漏るゝ如く見えたりき、四邊には多くの高弟、左右には仕法の諸帳簿、尊德はその間に於ける王侯なりき、圓應が少しく離れて座に着くを待ち

「坊主何の用があつて來た」

尊德は頭ごなしなりき、圓應は自若たり

「願ひの筋があつて參つた」

「何かは知らぬ、此陣屋へ來て、拙者事務の妨げを致すばかりか、門前に横はつて餓死しやうと云ふ、いかなる理ぢや」

「餘事ではござらぬ、先生に敎へを受けて、烏山領内に滿ちてある飢渴の民を救う爲めぢや」

「ごりや異しい、こなた出家でないか、出家で居て出家の道を心得ぬか」

「性來魯鈍には生れてござるが、出家の道を心得ぬことはござらぬ、愚僧當

年は五十三歲、十三の時から佛門に入りて、四十年來佛に事へるを專として居る」

「さらば聞くが、出家の道に、荒地を拓く敎へがあるか、百姓を富ます敎へがあるか、人民の飢に迫るを救う道があるか」

尊德の問は極めて正しかりき、圓應は騷ぎたる色もなく聲に應じて

「いかにもござる、事には相違あれど、佛の本意は衆生の濟度にある、民を憐み、飢を免れさするは、皆な佛道の極意でござる」

「はゝ、お身はまだ其の一を知つて其二を知らぬ、お身はまだその頭を見てその尾を見ぬ、人には職分がある、職分に由て事が岐る、領主は領主の道あり、家來は家來の道あり、坊主には又坊主の道がある、もし領主が家來の道を行はゝ、人君の道廢れて、國家は忽ち暗黑となる、もし家來が領主の道を行はゝ、僭上の心德を毒ねて、國家の亂れ是より生ずる、それと同じ理、領主もし出家の所爲を眞似て、葬禮祭祀の事に與らば、何をもて國民を治めることが能けう、出家にして領主の道を行はゝ、天下は遂に抹香の匂ひに卷か

るゝ、お身は出家で居ながら出家の分を守らず、御領主の職分を奪つて、興國安民の道を行はうとする、民を治め、荒地を拓き、百姓の飢渇を救うは、御領主の職分でないか」

「ではござらう、ぢやが出家も人ぢや、出家は只佛に事へるが道では無い、大慈悲心を基礎として、萬民救助の道を興る、これも矢張廣大無邊の……」

と圓應も敗を取る事なく陳べ立てぬ

「お身が夫ほどの理窟知るなら、何故その心もて、御領主に說かぬのぢや、烏山三萬石の百姓を活すも殺すも、餓に泣かすも食に飽かすも、皆佐渡守樣思召しにある事で無いか、假し又佐渡守樣御仁心あらせられず、座して百姓の飢渇を御覽ぜんとも、御領主御自由他人の口を容るべき處でない、お身に大慈悲心があるなりや、飢饉の慘狀目の前に來らぬ中、神明佛陀に祈禱を上げて、百姓の平穩、五穀豐穰、國家興復繁昌の誓ひを奉るべきに、其事は無くて緣も由緒もない我等の處へ、富國安民の仕法を問ひに來る、それが出家の衆生濟度か、乃公は心に誠實の光を包まずして、漫に名利を求めやうとする、輕薄無慚の徒が大嫌ひぢや、お身の所爲は佛道で無くて我意ぢや、誠の働きでなくて、名を釣り譽れを求むるのぢや」

圓應は遂に口を噤みぬ、膝の上に握みたる法衣の袖へ、ぽとり〳〵と涙が落ちぬ

「お身もし眞實に百姓の飢渇を救う心あらば、速に歸つて佐渡守樣をお說き申せ、それでもまだ佐渡守樣御覺りなく、御救助の手を下されずば、その時は止むを得ぬ、命を懸けて神佛に祈禱を上げい、此處の門前に餓死しやうとした覺悟を、お身の住む寺で行はい、お身の職分はそれで盡きる、どうぢや分つたか」

尊德の聲は雷の鳴り響く如く耳を貫く、圓應は唯伏目なり

「夫とも云ふ事があるか、有るならばそれで云へ、乃公の詞に點を打つ處があるか、有るならば夫で打て」と尊德は烈火の如し

圓應は寂然として動かざりき、時に熱涙の襟を潤すのみにて一言の答へも無かりき

「言ふ處なくば速かに歸れ、乃公は撫育仕法に暇が無い、お身などの相手に爲ては居られぬ」

云ひ捨てゝ座を起ちぬ、座を立ちて奥の間に入りぬ、面應は凹みたる眼にその後姿を見詰めて、

「恐附過失、無明の夢覺めてござる」

これ烏山仕法の初聲なりき

(四)

尊德の先見は違はざりき、今に恐しき大飢饉大凶歳來るべしと云ひし尊德の豫言は不幸にも適中して、天保七年(此時尊德五十歳なり)には風雨順を失ひ、五穀少しも稔らず、至る處野に菜色あり、餓殍道に横はりて、慘狀目も當てられざりき、飢饉凶歳の恐しき手、次第に迫り來るごとに、尊德の仕法を聞かんとして、櫻町陣屋に來る者引きも切らざりき、當時に於ける尊德の一語は、宛ら米一合に價しき、尊德の仕法に由りて飢を凌ぐこと、米粟に由りて

飢を醫する如くなりき

飢饉の風は鋭く、六十餘州の野も山も皆なその風に吹きまくられしが、櫻町領と青木村領とは、絶えず春風吹き渡りぬ、絶えず花咲き鳥謠ひぬ、天保初年より毎戸一段づゝ稗を作らせしが今日の用に立ちて、平生よりも尙優なる生計を送れるなりき

同じ野州の一角は、駘蕩たる春風吹き續きて、他の一角(烏山)に慘憺たる寒風吹き荒ぶと云はゝ、人はその現象の極めて奇なるに驚かん、されど同じ花園に咲く薔薇の花も、手入の屆きたるは香り深く美しく咲き、手入の缺けたるは色薄く香り乏しく開くにて、物に自然の道あるを知るべし、六十餘州至る處に飢饉の風逼く吹く中に、櫻町と青木村とのみその災害を免るゝは、これ卽て手入好き薔薇の美しく香れるに同じからざらん哉、月の初あれば月の終りあり、正月元日を祝ふものは、やがて來るべき師走節季の用意を怠らぬ筈なり、豐年の裏には凶年あり、順境の裏には逆境あり、元日に逢うて節季を思ふ者は年の瀨を越ゆるに苦勞なく、平年に凶歳の用意する者は、飢饉に

遭うて慘害に泣くこと無し、これ卽て天の理、これやがて自然の道、烏山領は平年に於て平年の用意だも爲さゝりしが爲め、凶年に遭うては他の國々村村より幾層倍の慘狀に陷いる、宛ら手入なき薔薇の色褪せ香り去りて、美しく花を着くべき勢だも無きが如し

座して餓に死なんよりは、假へ法の罪人となるとも飽くまで食ひ、飽くまで飲みて、鐵窓の中に獄死するの優れるに如かず、米一粒金一兩の世となりても、富みたるは餓を凌ぐべし、同じ領內に住みながら、同じ領主の恩德に浴しながら、彼は飽きて、是は餓ゆべき謂れなし、斯る時は一假の食をも分ち合ひて、甲斐なき命を繋ぎ合ふが同鄕同邑の情なり、さるを此地の富みたる者は、おのれのみ食を得て、他の貧人の飢渴に迫るを救はんとせず、實に不人情の極みなり、實に恕すまじき貪婪の仕方なり、よし〳〵斯る不埒不人情貪婪飽なきの人に向ひては、天に代りて誅伐を加へ、彼等が不義に貯へたる米麥を取り出して、幾千人の餓を凌がん、假へ一時の救恤なりとも、一瞬の救助を得ぬには優れり、貪欲の人の手に握りたるを奪はんには、宜しく相當の利器を要すべし、相當の利器とは何ぞ、道を說く舌にもあらず、助けを乞ふ涙にもあらず、たゞ一本の竹槍なり、只一旒の蓆旗なり、一石の血に代へて一升の米を得れば足れり、二三人の富を破却して、幾千人の飢を助くれば足れり

烏山領幾千人の貧民は、此心を以て蜂の巢を突きたる如く起り立ちぬ、飢たる咽喉に有らん限りの聲を張り上げて「命を救へ」「飢を救へ」「この憐れの渴を救へ」と天に叫び地に叫びして、犇々と城下の市へ押し掛け來りぬ、大久保家の家人はそれ〳〵に手筈を定めて、城下盡處に防ひ止めんとしたれど、決潰れ掛けし堤は人の力の强きを以ても容易に防ぐこと能はざりき、いかに偉大の力を以てするとも、海の潮の寄せ來るを防ぐべき工夫なき上は、この飢ゑたる人、渴へたる人を、空手に由つて追ひ返す手策はなからん

あはれ烏山三萬石の城下は、このひよろ〳〵せる飢餓兵の爲に蹂躙せられんとしぬ、城內に一人ありて二人なき德望家菅谷駒太夫時のお側用人が血を絞る如き聲にて說諭する詞も、遂に彼等を動かすこと能はざりき

（五）

「一同待たう、一同待たう、佛の御手がお前達の頭へ掛つた」

これ圓應和尚が櫻町よりの土產なりき、法衣の袖を北風の寒きに飜しながら、高足駄に冬の日の飽きを踏みて、竹槍蓆旗林の如く立てる中へ入り來る、

「天性寺樣ぢや〳〵」と百姓共は目引き袖引き「失禮してはならぬ、徐に徐に」

「お前達の頭へは佛の御手が掛つた、騷ぐなよ、決して騷ぐなよ、騷ぐとその手が消えて了ふぞよ」

尊德の前には子供扱ひにされたる和尚も、烏山住民の目よりは視上げる如き高僧なりき

「私共決して騷ぎたいことはございませぬ、この空腹さに堪へ難ねるのでございます」

「佛はお身達を見殺しになされぬ、然し佛は道に外れた者をお救ひなされぬ、佛のお助けを乞はうとする者は、優和しく村へ歸るぢや」

「村には米がございませぬ、麥も粟もございませぬ」

幾百千人の飢餓民は、子供の物を强請る如き聲なりき

「佛を信ぜよ、只管に佛を信ぜよ、佛を信ずる者には救ひがある、救ひを得やうとする者は村へ歸れ」

「天性寺樣は活佛ぢや、僞言はお云ひなされぬ、皆の者歸らうかの」

誰云ふとなき優和しき聲は起りぬ

「私どもこんな事を爲たいのではございませぬ、只和尚樣のお慈悲に待ちます、お救ひ下さりませ、お救ひ下さりませ」

圓應和尚の胸には、尊德の活る敎訓宿りぬ、彼は尊德の敎訓に由りて、豁然大悟する處ありき、枯れたる稻も人間の誠には活き、乾きたる田も人間の誠には潤ふ、尊德は仁義誠實の四字に由りて、櫻町四千石を回復し、青木村八百石を興隆したり、人間の誠その極に至り、領內の百姓又誠實の二字を守りて、一圖に農作に從事せば、富國安民の道立ち所に成らん

彼はこの心に由りて烏山の人々に接するなり、この教訓の主意を奉じて、日夕仕法に從事するなり、彼は多くの百姓が圓應和尚を信じ、圓應和尚に隨喜し、竹槍を伏せ、蓆旗を卷き、悄々と歸り去るうしろ姿を見て、一種悲愴の感に打たれき、彼等可憐の農民を救うものは誰ぞ、廣き世界にたゝ二宮尊德あるのみ、彼等枯骨に肉する者は何ぞ、廣き世界に只誠の一字あるのみ、彼等死を決せる百姓共が、我の一言を信じて悄然と歸り行きしは、我の胸に蟠まれる誠實の力に由れるなり、尊德先生の教訓を其まゝに傳へたるわれの眞心に動きしなり

圓應が斯く獨語て立ち居れる時、背後よりその肩を打ちて

「和尚、和尚」と呼ぶは菅谷駒太夫なり

「や、御家老か、今の樣何んと御覽じた」

「まこと貴僧お蔭、貴僧お助けなくば、三萬石のお城下を灰原にする處であつた」

「これは恐僧の力ではござらぬ、恐僧は只活神の托宣を傳へたまでぢや」

「何んと云はるゝ、活神と――活神とかな」

「いかにもぢや、此の無慘の窮を救う、活神が在せられる」

「活神とは」

「御存じないか、彼の櫻町の大偉人ぢや」

「おゝ兼て噂に聞いた二宮某がしでござるかの」と駒太夫は進んで問ふ

「世は廣い、人の數は多い、なれど大きい手と大きい心と、爾うして大きい德とを以て、枯木に花を咲かする者は、尊德先生の外にない、恐僧參つて說くだけの事は說き、聞くだけの事は聞いて參つた、此上は其許行かせられ」

「我等に……櫻町へ行け、と仰せか」

「夫も普通は爲らぬ、佐渡守樣直書を持たせられて、救荒安民の道を問はせらるゝぢや、世にも憐れな今の百姓共救う道、その外に何もござらぬ」と和尚は熱心に「疾く行かせられ、御家老歸らせらるゝまで、憚りながら恐僧百姓共をお引き受け申すでござる」

（六）

尊德の膝下へは今日も又多くの門人來りて、盛んに報德談を聞き居たり、折柄來りしは青木村の勘右衛門なりき

「久しく御不沙汰を致しまする、先生御變りもございませぬか」

「おゝ」と尊德は機嫌好く「勘右衛門か善く參つた、村の者皆健康か」

「お蔭樣で一人の病人もございませぬ、お蔭樣でこの飢饉を安樂に過し居ります」

「彌七は何うぢや、彼も機嫌克く致し居るか」

「彌七の事でございます、彼仁例の勤勞家、朝夕星を戴いて家業に勉めましたゆゑ、農作の收入もよく、家運も繁昌してございまするが、倅の彌右衛門、是が一風異つた人でございまして喃」

「彌右衛門は存じて居る、さらば彼が家督をしたか」

「親の家は繼いでも、親の心は繼ぎませぬ、最も惡人ではございませぬが、家業に出精致しませぬ、田にも畑にも作物は植ゑまするが、肥料を遣るは損ぢやなど申して、其儘に捨て置きまする、それゆゑ上田は中田になり中田は下田になり、下田は草原になつて、折角の家柄も年々衰微するばかりでございます」

勘右衛門の詞の終らぬ中、尊德ははたと膝を打つて

「其處ぢや、人間處世の理は其處にある」と云ひつゝ門人を見返りしが「お身達今の話を聞いたか、今の話は彌右衛門一家の事ぢや、なれど是が自然の大道理、天下國家の興廢存亡も又それと同じぢや、肥料を以て作物を作ると財を散いて領民を撫育するとは、大小の相違こそあるが事情は一ぢや、田畑衰微するは肥料が足らぬからで、國家の廢亡するは民政が屆かぬからぢや、民政の屆かぬ村々はまづ堤防が破損する、溝洫が決潰する、次には道路橋梁が破壞する、堤防が破損すれば川付の田畑が荒れ、用水洫が惡くなれば高田卑田が用を爲さぬ、道路の手當が行き屆かぬ時は、牛馬が通はず、牛馬が通はねば耕作が十分能きぬ、耕作が十分爲きねば食物が自然に減る、食物が減

れば人が離散する、人が離散すれば田地が荒れる、田地が荒れたら租税が減る、租税が減れば諸侯が困窮する、これは當然のことでないか、領主も百姓も心を注けねばならぬのは此處ぢや、そこで……」

「申し上げます」

尊德が尙仕法の講義を續けんとする時、執次の門生は次の間に手を仕きぬ

「野州烏山の城主、大久保佐渡守樣家老菅谷駒太夫と申す仁、佐渡守樣親書を携へ、先生へ拜謁を願ひ居りまする」

「烏山は日外參つた圓應の在所ぢや」

「御意にござります」

「やはり救荒の道を聞かうといふのか」

「渡州樣御親書これへ持參してござります、まづ御披見ござりませ」

執次の門人は恭しく手紙をさし出しぬ、尊德は受け取りて封を切る、手紙の要は、領內疲弊、人民餓に迫つて一揆を企てんとするに至る、足下力に由てこの困窮を免るゝを得ば、望外の慶、委細は家臣菅谷駒太夫より披瀝、一臂の勞を吝み給ふ勿れ、との意味懇切を極めたり

「何れも見やれ、大名の彌右衞門がこれへ現はれた、烏山三萬石の衰亡、君臣その道を失うからぢや、予もお身達門人は多くある、仕法諸勘定に暇はない、然し烏山公は小田原公御分家ぢや、予に緣故のない事もない、兎も角も逢ふ、そのお使者を對面の間へ通して置け」

尊德は何日に無き機嫌なり、いかに佐渡守殿御親書ありとも、初めて訪問せる人に對して斯く速かに、且つ快く面會を承諾きたるは稀なりき

(七)

駒太夫の詞は極めて慇懃なりき、辭を卑くし、禮を厚うして、烏山三萬石を水火の中より救ひ出されんことを懇願しき、尊德は彼の云ふ言をつく〴〵と聞きたる後

「私は百姓でござります、學問もなければ能も無い、眞の人間に生れたばかりでござります、然しお大名衆の御威光にも御理解にも、能きかねる農作の

事は少々心得てございます、お大名衆は御威光が優れて居る、けれど茄子を大きくする道を御存じではございますまい、お大名衆は御學問に秀でさせてございます、なれど大根を太らする法を心得ては居らせられまい、私は只その法を知つて居るばかりでございます、草原が一變すれば米となり、米が一變すれば御飯となります、この御飯の前には心のない鷄も集ります、犬の子も參ります、尾を掉れといへば尾を掉ります、お廻りを爲よと云へばお廻りも致します、心のない鷄や犬でも御飯の前には一生懸命の働きを致します、私はこの理を推して至誠を盡すのでございます、御威光の前には尾を掉らぬ犬を、自由に動かせる原を作るのでございます」

「お詞はよく解つた、烏山は自然の瘠地、其處へ肥料を與へいで、只管收穫を多くしやうとした、その結果が斯うなつたのぢや、今となつては滅亡を待つ外もない、貴殿お力で再生の歎びを見れば、領内數千人の命が助かる、平に御助力を頼み存ずる」

「私如きをそれほどに思し召して、態々御親書を遣はされた、その御仁心が御領内に行き渡らぬ筈はございぬ、然し私只今では小田原公御家人並、假へ御親書を下されても、自儘に御領内の御仕法へ手を出すことはなりませぬ」

「さらば君侯お頼み、お聞き入れはございぬ哺」

「假しお頼みはございませいでも、人の難を救ふのは私本來の大願、烏山三萬石滅亡の淵に沈むといふを、餘所に見る心はございませぬ」

「流石は先生、その御仁心が無くてはならぬ」と駒太夫は身を進め「いかにせば烏山仕法にお手をお着け下さらうの」

「渡州公は小田原公御縁者ぢや、一言お願ひの筋あらば、小田原公より改めてお詞も下らうと存ずる、その時が拙者烏山仕法に手を着くる始めぢや」と尊徳は云ひ切りぬ

「小田原公お詞の下るまでは、烏山仕法に手を着ける事爲らぬと仰せか」

「主命無き中、手を着けること相成らぬ、ぢやが御領内の疲弊、一通りではございるまいの」

「旦夕に迫つてございる、百姓共の手にする竹槍——その日の飢を凌ぎかねて

自暴自棄に取り出す竹槍、それが今にも御城下の町人を傷けやうとする、烏山三萬石一縷の望みは、只貴殿お心に縋つてござる」

「その百姓共の飢を助くる、御用意のお金子も無いと見えます」

「お恥しいが御金藏は皆な空ぢや」

「さほどの處、烏山公より小田原公へ申し出で、小田原公より改めて私へ御下命、左樣に廻りくどい事を爲させらるゝ暇もあるまい」

「實檄鈔はその間に死ぬる、切に御工夫を賴み存ずる」

「切迫の急ぢや、切てはこれをさし上ぐる」と尊德は手文庫より二百兩を取り出して、駒太夫の前に置きぬ、駒太夫は夢に夢見たる心地なり

「御芳志御金子、これを下し置かるゝぢやな」

「九牛の一毛、自ら手を着けることこそ爲られね、黃金を融通するは我等自由でこれで急場を凌がせられ」

「御仁心この黃い色に光る、何んとも言語に絕えた歡び、烏山疲弊の極み、一兩の融通さへ絕えて、勿體なくも君侯さへ白粥に餓を凌がせられる、其處へ初對面の拙者に對し二百兩の御融通、旱魃の田に水を得たも同樣の心でござる」と、駒太夫は尊德を伏拜みて、涙ながらに歸り去りき

（八）

烏山公の親書は日ならずして小田原公の手許に達しぬ、要は領內疲弊今は只座して一家の滅亡を待つ外無し、願はくば御家中二宮金次郎をして、當家興隆の仕法を立てさせたまへと云ふにありき

由て小田原公より尊德に御內意あり、烏山は我等緣者なり、其方手に彼が窮乏を救ふ手段あらば我に代りて諸民を撫育せよ、烏山領內其方誠心を待つ所多し、との口上なりき

尊德は決然として立つ

彼は撫育の第一着手として、二千兩餘に相當する米粟を烏山に送りたりき、二千兩餘に相當せる米と粟とは、當時の相場にして始んど無數なり、此の慈悲善根の米粟を積みたる大八車は櫻町より烏山に至る十餘里の間に絡繹たり

き、彼はこの米粟の到着を待ちて、天性寺の境内に十一棟の小屋を建て、領内幾百千の飢民を集めて、盛んに粥を炊き出しぬ、圓應和尚の叫びたる「佛の御手」は果して彼等の頭に掛れり、圓應和尚はおのれ尊德の大慈悲心に感りたる望み協ひて、こゝにこの救恤を得たるなれば、その歡び譬へんに物も無く、法衣の上に襷して自ら炊出米の分配に努めたり、尊德の仁心、圓應和尚の熱誠、これに加ふるに菅谷駒太夫の忠節、これ等よく調合融和されて、數千人の飢民一人の過失も無く生命を全うすることを得たりき

領主佐渡守殿は云ふまで無し、一家中の者、上は老臣重役より、下は足輕同心に至るまで、悉く尊德の仁心に感じ、この人の手に縋らば、御領内の衰頽も二三年ならずして回復せん、この人の身に發る清き光輝は、櫻町青木村の田地田畑を遍く照らして、この辛き世に絶えず春風の吹き滿つるを見る、この人を擁てこの大業を遂ぐべきはあらざらん、誠心をもて頼み聞こえば、よもお聞き入れなき事はあるまじ

一家中の評議は決しぬ、佐渡守殿の直書、家老、用人、番頭、小頭、與力、同心に至るまで連印せる願文は引き續き尊德の前に展べられぬ、尊德は沈と考へぬ

三萬石御領内の下民、今にも飢餓に斃れ死ぬべく、今にも一揆叛逆の騷動あるべく、今にも御家名に疵の付くべき大事起るべしと聞くに忍びず、且は君侯の御諚を畏みて、こゝに數千人の命を救ひぬ、さすれば此にて我事は終れり、國家再興の道は口に云ふべくして事に行ひ易からず、原より我等の關知せざる所なり、これは平に御免を蒙る

これ彼の口上なりき、されど此柱一本を命の杖と頼みて、必死に縋り付ける諸家中の面々は、交る〳〵櫻町の陣屋を訪ひて、その惠みを受けんとしぬ、尊德も今は謝絶すべき詞なし、殊に小田原公御親類とあるに絆されて、遂に仕法の口を開く、菅谷駒太夫、大塚孫太夫、大石安右衛門、當路の役人は皆な尊德の前に平伏して、その云ふ所を聞かんとしぬ

尊德の仕法談は例の如く眞率なり、例の如く平易なり、又例の如く誠實な

「貴殿等は何と思召か知らぬが、國を興すは容易でない、誠に古今の大業である、故に天命に安んじ、困窮の時に隨ひ、天理自然の分度を守つて、民の心を心とせねばならぬ、貴公等に夫が能きやうか」

「何事も仰せに從ひ申する」と駒太夫は一藩を代表して、力ある聲に云ふ

「第一は艱難を原として艱難を行うことぢや、下々の安堵するを見て始めて貴公達が安堵することぢや、もし一人でも貧窮困苦するものあれば、御領内の興復が十分に調ふたのでは無い、上は御領主より下は與力同心の末々まで、民の憂に先つて憂ひ、民の樂に後れて樂み、民百姓を惠むこと宛ら我子を愛し惠むやうにせねば、どうしても衰國を興すことは能きぬ、ぢやが貴公達にこの眞情はあるまい」

最後の一句は活る神の聲なりき、一同は只平伏したるのみ

「貴公達は眞に百姓の難義を恤むにあらずして、君の用度の足らぬのを悲むのぢや、一藩の恩祿十の三にも當らず、家中の面々疲弊に堪へ難ぬるに由つて、町人共から金を借り入れ、遂に君侯を難義の淵に沈めたのぢや、借金には利息が付く、利息の滯は國をも傾ける、世に金の利息ほど恐しいものは無い、寐て居る間も休まずちび〳〵と骨に食ひ入る、これが亡國の基になるのぢや」と尊德は詞鋭く云ひ切て後「凡そ天地間の物、大小各分限といふがある、分に應じて雜用を節するに、不足の立ちさうな筈がない、もし分限を守ることを爲いで、徒に財寶のみを費さば、百萬石の身代も立ちどころに破滅する、一萬石はおろか、十俵二十俵の御扶持を戴くものも、分を守て節約すれば、立派に一家が支へられ行く、然も烏山殿は三萬石のお高がある、三萬石は空の名ぢやない、米穀の收入三萬石の土地を御領知あらせながら、僅か二三百兩の用度に事を缺き、十石二十石の米に不自由あらせられるは、抑も何んのゆゑであらう、云ふまでも無く財を用ひるに節がないからぢや、國の分度をお知りなさらぬからぢや、もしその本原を明らかにして、國家再興の實を見るまで、今の艱難をお續けなさる覺悟あらば、必ず恢復の時がある、私仕法を立つるとも、舊借は舊借、お入用はお入用、これが爲きぬからとて、他領の年貢を御融通申す理には參らぬ、烏山の困窮は烏山の金で補ふ、私の

胸には成算あるが、人の心に相違がある、假へ私が仕法をしても貴公達の氣に入らずば詮が無い、これは廢止する外あるまい」

「左樣にお見捨て下されては爲りませぬ」と駒太夫は恐る〳〵頭を上げ「先生仰せ如何な事にても聞きまする」

「きつとお聞きか」

「一命に換へても、違背致す事ではございませぬ」

「さらばまづ天分の基本を明かにする、烏山領内の年貢、豐凶無差別十年の收入を平均して、向後の分度を定めやう、速かに古帳面を持參なされ」

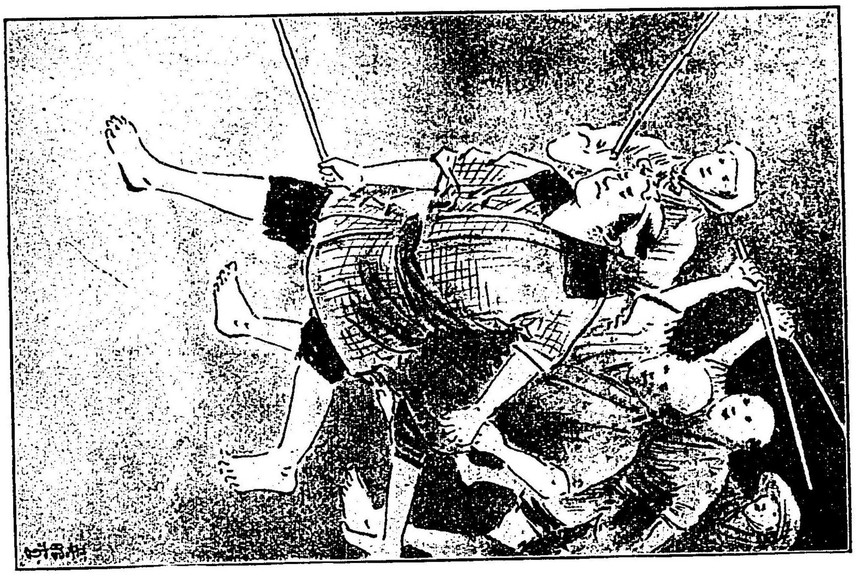
斯くて十年間の古帳面は、山の如く櫻町の陣屋に積まれぬ、駒太夫を頭領とせる烏山の役人數十人は、櫻町陣屋に詰め切りて、この帳面の取調べに從事しき、衣服食料悉く尊德の支出なり

この調査は數ヶ月に亙りて終りぬ、尊德はそれに由りて自然の分度を確立しき、向後いかなる事情ありとも、君臣上下一致してこの法に背く無からんことを命じぬ、駒太夫以下歡び勇んで退く、烏山三萬石は再び大盤石の上に立ちき、佐渡守殿を始め家老重役連署、先生御敎導の主意に由つて、今日より國家再興の事業に着手す、願はくば三たび救恤を垂れたまへ、と云ひ來る

尊德は更に多くの米と金とを支出して、烏山領内の百姓を撫育しぬ、その誠心は風の如く傳はりて、領内の人々懸命に農作開墾の事に從ひぬ、その效は忽ち現はれ、一二年の間に廢地を開くこと二百二十四町、粟を出すこと二千餘苞に及べりき

尊德これを見て「烏山殿いかに借財ありとも、年々餘分の收入に二千苞の粟あれば、復舊の道難くもあるまじ」と歡びぬ

これ烏山仕法の事情なり、烏山の仕法は圓應和尚の入寂、駒太夫の地位を去りたるに由りて不幸にも中止の運命に遭ひたれど、されど尊德の仁心は不朽なり



人生は大海、一家は船の如し

家屋のことを俗に家船又は家蛮船と云ふ、面白き俗言なり。家なば寓に船と心得べし。是を船とする時は、主人は船頭なり、一家の者は皆乗合ひなり、世の中は大海なり。然る時は此家船に乗あるも又世の大海に乗あるも拵れざる事にして船頭は勿論、此船に乗り合たる者は一心偽力この家船を維持すべし。扨此家船を維持するに楫の取様と船に穴のあかぬ様にするとの二ツが専務なり。然るに楫の取様にも心を用ひず、家船の底に穴があきても是を塞がんとせず、主人は働かずして酒を呑み、妻は淫蕩を楽しみ、倅は博奕に戯り、二男は詩を作り、歌を謳ひ、安閑として歳月を送り、終に家船ごとして沈没するに至らしむ、歎息の至ならずや。

（翁の訓言）

第二章

（一）

凶歳は凶歳に次ぎ、飢饉の風は至る處を吹きまくり、天保七年の國々は殆んど餓孚をもて充たされぬ、中にも東海道大磯あたりは、悲風惨雨端より端を撲ち暴して、土地に微の生色も無かりき

されど讀者よ、世には他人の災害を奇貨として、自家の腹を肥やさんとする者あり、他家の涙を玉と見せて、赤兒の手より食餌を奪ひ取らんとする者あり

大磯の宿に住みて代々米屋を營業とせる川崎屋孫右衛門といふがありき、綽名を仙臺通寳と云ふは、世間一般に通用せる謎言なるべし、江戸にては近く將軍家よりのお救ひ米ありて、人氣やゝ立ち直りし由を聞き、少しにても安價の米麥あらば、一手に買ひ占めんとの心あり、人には告げず只獨り江戸へ下る、その留守中に土地の窮民は一致して、仙臺通寳の門前に押し寄せぬ、

孫右衛門の米廩には、まだ手の着けられぬ玄米白米山の如く積まれたるを知ればなりき

孫右衛門の家には番頭伊三郎店を管かりぬ、妻のお米、姉娘のお重と、妹娘のお末とを左右の手にかき抱きて、淋しき奥を守りてありき

同じ人間に生れながら、他人に爪彈きさるゝ強欲非道の人を良人とし父とせる者は、恐しき黑雲の身を包む如くに感ずるなり、その眼にもその頰にも何となく打悄れたる狀態ほの見ゆるなり

「お父樣はの、まだお歸りござりませぬかの」

偶に外に出づることありても、道傍に咲く花、背戸に繁る樹々の外は、誰とてその身の伴侶となり與るゝ者なきを何とかせん、近所に年頃の子供多くあれど「仙臺通寶の子」はお友達に爲らずして爪彈きす、故に彼等は他の婦女子供に優りて、一際父を戀ひ慕へるなり、お重はその年十一なり

「もう近い中にお歸りぢや、それを樂みに溫和うせねばならぬ」

お米は慰める如くに云ふ

「母樣々々」と六歲に爲れるお末も同じやうに「お父樣、何故お歸りが遲いのでござります」

「お前が無理を云ふからぢや、これからもう無理云ふことなりませぬ」

「無理云ひませぬ、早うお父樣呼んで下さりませ」

世間にては仙臺通寶なれど、彼等母子の爲めには南燦小判なりき、世間の人よりは惡魔惡鬼の如く云はるれど、お重お末の爲めには神なりき佛なりき

「無理さへ云はねば今の間にお歸りぢや、二人とも天智天皇讀んで、大人しう待ちてあるぢやぞ」

お米が二人の子供を相手に、良人の着るべき藍秋田の小袖縫ひ居れる時、表口を大股に入り來れるは、此土地の破落戶久吉なり

「番頭居るか、久吉ぢや」と無遠慮なり

表には十數人の窮民、交る〳〵店頭をさし覗きて、何事をかひそめき語る、伊三郎は結界の中に、算盤勘定餘念もなく見えたるが

「米が欲しうて來たか、それとも他に用でもあるか」と木で鼻括りたる挨拶、

仙臺通寶に使はるゝ者は銭一文にも通用せぬらし

「米を買ひに來たのぢや、飢饉の年の、貴い米を買ひに來たのぢや」

「米が欲しくば何時でも賣る、その代り前銭ぢや」

「前銭承知」と久吉は番頭を睨ひやうにして「それはそれ、些と頼みたいことがある」

「頼みたい事とは」

「お前にも目がある、お前にも耳がある、引き續く飢饉、宿中の難澁、見聞きして居やうのう」

「見やうが聞くまいが、その樣なことお前の厄介には爲らぬ、欲しい米なら賣て進ぜる、四の五の云ふには及ばぬことぢや」

「四の五の云はぬ」と久吉は顏の色をかへ「一斗だけ價が減らして貰ひたい」

「はゝゝ」と伊三郎は手に持つ算盤を投げ出して「何事かと思へば一斗だけ價を減らせか、はて蟲の好いお客ぢやの」

「無理なことは云はぬ、當家も代々この宿に店を張て、これだけの物持になつたでないか、すれば少々は辛抱して、土地の爲を謀るが當然、御領主を始め御家老樣お役人衆、名主庄屋町代の面々まで、金のある人は金、米のある人は米、それ〳〵に出し合うて救助の法をお立てなされた間に、孫右衛門殿ばかりは一合の米、一分の金もお出しなされぬ、人情はさうした物でない、高が一斗の米の價を減らす分ぢや、旦那殿に頼んで下され」

「處がその旦那樣はお不在、私では捌きが付き難ねる」と伊三郎は云ひ切て

「出直して來て下され」

「出直して來いと云ふは……孫右衛門殿何日お歸りぢや」

「何日とも知れぬ、早うて明日、遲うて二月三月後ぢや」

（二）

「これ〳〵」と聞き難ねて表口より又一人入り來る「久吉何日までも何をして居るな」

「番頭どんが因業、一斗の價も引かぬといふ、それで私は腹が立つのぢや」

「何ぢや一斗の價も引かぬ、相手は川崎屋孫右衛門樣、高がそれほどの事、爲て下されぬ法はない、お主の頼みやうが悪いのぢや」

「久吉はおろか、お釋迦樣がお頼みなされても、江戸にござる旦那の耳へ聞こえさうな筈は無い」と伊三郎は空嘯く

「旦那が不在なら、店を預る番頭の手で斗うが當然ぢや、宿中の貧乏人が大勢表へ押し掛けて居る、お前の捌きで私の顔を立てゝ下され」と久吉は又下から出る

「米を賣て利を得よとの吩咐は受けて居るが、米を賣て損をせよとのお指圖はまだ受けて無い、これは相談に乘られぬ筈」

「これほど事を分けて頼むにお前私達の頼みを聞き入れて呉れぬのか」と久吉は氣色ばむ

「背かぬとは云はぬ、旦那が不在で分らぬといふのぢや」

「諾し」と久吉は恐しき目に睨み付け「お前が爾う云へば夫でよい、お前の家に金があるなら、私等の手には骨がある」

久吉は怒りを帶んで去りぬ、されど後には尙一人の男殘り居たり

「番頭、お前も人間の皮を被つて居るではないか、目もあれば口もあるでは無いか、空腹い苦しみが何れほど辛く、貧窮の悲みが何れほど深いかを知らぬ事はよもあるまい、土地の貧乏人一統が手を下げて頼むのぢや、少し色のある返事して呉れても、罰は當るまいぞよ」

「耳はあつてもお前方の泣き言を聞く道具ぢや無い、旦那の不在に貧乏神が入り込んだと聞こえては、店を預つた私の顔が立ぬのぢや」と伊三郎は再び算盤を取り上げる、些細の利益も見免すまじとする目の色は鋭く光りて、彼方此方帳面を繰り返すのみ、前に飢渴の貧民の食を乞ひて立ち居れるをも知らざる如し、外に十數人の同じ仲間が、その返答を聞かんとして犇くを意に介む樣もなかりき

「貴樣は鬼ぢやな」

痩せたる仁王の如くに立ちて、凹みたる目に、じつと伊三郎を睨み居たる男は、物凄きほども慄ひたる聲に斯く叫びぬ、されど伊三郎は沈着きたり

「鬼かも知れぬ」

「眞に鬼ぢや、お主は鬼ぢや」

「乃公が鬼なら、貴樣は餓鬼ぢや」

「おゝ、餓鬼の遺恨――」

一聲猛く叫ぶと共に、彼は右手に掴り居たる手頃の小石を伊三郎の面上に投げ付けぬ、餓鬼の手にも鬼を傷くる力はありき、伊三郎は頬骨をしたゝか撲たれて「あッ」と云ひさま、結界の中に平伏しぬ

この不意の礫は外面に立てる仲間の者に、談判不調を知らすべき合圖なりき、彼等が仙臺通寶の膝下に跪きて、一斗の米の價下を依賴せしは、實一日の飢を凌ぐについて百計盡きたる後なりき、救助を乞ふべき所には救助を乞ひ、惠みを受くべき家々には惠みを受け、今は賴る處もなく身を寄せる處も無くて、孫右衛門の店に一樓の望みを繫ぎ來りしなりき

然もこの一樓の望みは絶えぬ、今は飢死する外なき身、同じ死ぬる身ならば、日頃貪欲の爪に火を點して、土地の人々を燒き殺さんとせる仙臺通寶の

家藏を破壞せよ、年來我等に辛かりし彼の無慈悲無仁義の惡鬼の頭に、一大槌を加へて後、お上御法の下に獄死せよ、とは彼等が當家の救助を乞はんとせし時の決議なりき、最初の礫はその覺悟を行ふべき合圖なりき、前に久吉が憤然として外へ出でしは、早く人々に伊三郎の返答の人情に外れたるを報告し、兼て一同に非常手段の用意を爲さすべき爲めなりき

「さア來い、さア來い」

これ急先鋒の叫びなり

日は暮れんとす、遠くに聞こゆる海の音も殺氣を帶んで澎湃と高く鳴る

(三)

鋤鍬を持つもの、蕊口を携ふる者、或は竹槍、或は棍棒、手に〳〵柄物を打ち振り〳〵、川崎屋の門前に蝟集りし人數は、十數人が數十人となり、數十人が數百人となりて、その勢宛ら潮の寄するが如くなりき

「母樣いのう、母樣いのう」

お重お末はお米の兩袖に縋り付きて、聲を限りに泣き叫ぶ、お米は素破一大事と見るが否な、大切なる書類、その身の預りし金銀、持ち得らるゝだけを風呂敷包みにして、緊乎と腰に纏ひつけ、二人の子供を兩手に抱へて、きつと店の方に耳を傾くれば「わァ〳〵」と唸るが如き人聲、戸を毀つ音、壁を突き落す響き、その間々に

「日頃の怨みを今報うのぢや、孫右衛門の手に掛つて、代々の身代を破壞された禮を今云ふのぢや、よくも〳〵弱い者の血を絞つたな、よくも〳〵强欲非道な事をしたな」

この聲恐く殺氣を帶びぬは無く、その響き恐く憤怒に慄へぬは無し

「恐いわよ、母様恐いわよ」

涙も出で難ぬる目に四方八方を見廻りて、お重は母の身に縋と抱き付く、給金の爲めに雇はれたる下女下男は、この大騷動を見ると共に、各自荷物を取り出でゝ何處ともなく逐天したれば、さしも廣き家に殘りしは母子三人なり、然も家の周圍は恐しき貧民の聲にて取り卷かれぬ、お米は如何とも爲んやう無く、夢の如く緣外に立ち縮みぬ

「お家さま、もう駄目でございます」

面一面を血塗れにしたる番頭の伊三郎は逃うが如くに奥の間へ逃げ來りぬ

「おゝ、伊三郎」とお米は詞急しく「何事ぢや、何事が起つたのぢや」

「暴民でございます、飢餓に打たれた暴民でございます、暴民は何を爲るか知れませぬ、早うお逃げなされませ」

斯ういふ中も止み間なく、屋後屋前周圍に暴民の叫ぶ聲、猛風の谷間を吹きまくるが如く、洪水の堤を亂れ打つが如し

「今に此方へ參ります、彼等の手に掛つては、義理も情もあつたものぢやござりませぬ、早うお逃げなされませ、私がお末様を負ぶしてお進げ申します」

「眞にの、恐しい聲が聞こゆるの、こりや大變ぢや、斯うしては居られぬの」

「早うお逃げなされませ、もうお次の間まで來て居ります」

身にも替へじと思ひたる黄金も、命の瀬戸に迫りては塵芥なり、お米は一たん腰に纏ひたる黄金の包を釋いて

「これがあつては歩かれぬ、切てこれだけはと思うたれど、是非が無い、捨てゝ行かうぞよ」と云ひながら仍執着を絶ちかねて、わア〳〵と鯨波を擧げる暴民共の聲々に聞き怯ぢしながら、捨てんとしては捨て難ぬる樣無慘なり

「お捨てなされませ、そのお心から今度の騒動が起るのでございます」

伊三郎がお末を脊に起ち上る時、お米の手より黄金包は投げ捨てられ、お米と伊三郎と命から〳〵裏門を逃げ出づる時、數百人の暴民は「どッ」と叫いて、奥座敷、土藏、納戸、臺所の八方に押し入りぬ

彼等は米藏より米麥粟稗を取り出して、門前に高く積み上げ

「孫右衛門代々の强欲に由つて、稼ぎ貯めた米麥ぢや、この中には宿中貧乏人の血や膏が交つてある、思ひ〳〵に取て行け」と口々に呼び立てぬ

是豈一種の刑罰にあらずや、これ豈毒をもて毒を制する天の配劑にあらずや、次には金藏より多くの金銀を取り出して、これをも門前に堆く積みぬ

「孫右衛門に血を絞られた者はこれを分取して腹を癒よ、孫右衛門に命を縮められた者は、之を取て怨みを返せ、孫右衛門の金藏には積んであつたが、

云はゞ我等先祖が預けて置いたも同樣な物ぢや、分捕功名勝手次第、金は要らぬか、金は要らぬか」

飢饉の風吹き荒む中に、米と黄金との施行を爲すなれば、その日の糧に困る細民ども、遠近より駈け集りて、瞬く間に分取し行く、その間に幾百人の暴民は、有る限りの器具を破壞し、有る限りの財物を散亂し、襖は蹴破り、戸障子は叩き割り、板、壁は再び用に立つまじきまで切り刻みて、やがてどッと駈け出でぬ

「これで怨みの幾分は晴れた、これで胸がすッと澄んだ、近頃の快い心持ち、近頃の面白さ、非出度いぞ〳〵」

魔の叫びかと思ふまで氣味惡き笑ひ聲を漏らしつゝ、一同凱歌を擧げて引き取る

彼等はこれを手始めとして、他の二三の富豪をも切かしぬ、伊三郎が一斗の價下を爲さゝりし不慈悲は、大碍富家殘らずの災厄となつて、これに失ひし金錢米穀幾千兩の高に上りき

(四)

孫右衛門は斯くとも知らず江戸より歸りぬ、然も彼の入るべき家はあらざりき、茫然として聳えたる屋の棟は、悉く瓦落ちであはれ棟の骨を晒し、白壁建て續きて夕陽差明きまでなりし幾戸前の土藏は見る影もなく毀たれて、巣を荒らされた鼠の子の潰れ口より出入する樣憐れなり

孫右衛門は茫然として荒屋敷の中に立ちしが如何に考へても口惜しく又如何に考へても無念なり、われに何んの怨みありて斯る暴擧を爲したるぞ、われに何の罪ありて斯く無慘の憂目を見せしぞ、今は捨て置くべきにあらず、惡人を懲罰するはお上の役目なり、可しお上役人の手を借りてこの怨みを報しくれん

彼は斯く決心して町會所へ訴へ出でぬ「宿内の貧民共無法にも家を毀ち財物を奪ひ、剩へ妻子眷屬を何處へか追ひ遣りぬ、實に言語同斷の仕方なり、速かに御詮議、速に惡人逮捕、速かに殿刑に處せらるべし」との申立なり

然も役人は善人の惡行を憎むよりも、まづ惡人被害の訴訟を憎みたりき、役人は皆な孫右衛門の平生を知りぬ、今度騒動の顚末を知りぬ、黨を組んで良民良家の財物を掠奪するは、原より法の允さゝる處なれば、それ〳〵吟味取調に着手せしは勿論なれど、被害者孫右衛門も又「宿中の貧民食ふに米なく、着るに物なく、飢餓の爲めに身を亡さんとするもの、幾十百人と數知れぬ中に、其方のみ粟を積み米を貯へ、食に飽き、衣に溫かなるを有難く思ふ樣も無く、强欲非道を事として、遂に今度の騒動を惹き起せしは不埒至極なり、亂暴を爲したるは宿内の貧民なれど、彼等をして兇行を爲さしめたるはその方の無慈悲にあり」との理由に由て、忽ち獄舍に投ぜられき

孫右衛門驚きてさま〳〵に陳辯したれど效ぞなき

お米は騒動の鎭るを待ちて家に歸りぬ、されど身を置く處も無し、泣く泣く破れ壞れたる庇の蔭に身を寄せて、二人の娘を左右の袖に包みながら「今にお父樣お歸りなさるよ、お父樣お歸りなされば、この家も從前の通り綺麗になる、お重もお末も美しい衣服が着られる、暫時は寒くとも忍耐を爲るぢ

や、暫時は悲しくとも辛抱するぢや」

二人の子供に說き聞かす詞の端が、忽ち涙に濕り來る、伊三郎も又面部の傷を白木綿に繃帶して、主人の爲めに米を炊き菜を作りて、男の手に足らぬ勝の介抱す

されど天はこの不道の妻子從僕を憫み給はざりき、重ね〳〵災難を下して、先祖代々强欲の罪を問はせ給ひたりき

秋もはや暮れんとして、荒涼たる滿目の風光、宛ら野分の朝を見るが如く物淋し、葉は落ち幹は痩せて、青き實一顆すら無き柿の枝に、一羽烏は友を呼びて鳴き、芝は枯れ、露は乾きて、その上を冷き西風吹きすさむ、道傍には蟋蟀の聲絶え〳〵に聞こえて、市の中ながら野末の暮に立つ如し、道行く人の笠も見えず、驛路の馬の鈴の音も寂れて、只どう〳〵と風のみ吹き募る折柄、火は驛外れの農家より起りぬ、人は生氣無く、草も木も打慄れて半枯れたる世の中に、火の勢のみは猛く、見る〳〵中に燃え擴ごりて、大磯全市を紅き焰の中に包む、人々死力を出して消防に盡したれば、漸くにして消し止めたれど、孫右衛門の家は悉く灰となりき、僅に殘れりし破れ屋、破れ藏、多少の米穀、多少の器具、皆悉く燒き盡されて、後にはお米母子の悲嘆のみを剩しき

さすがの伊三郎も遂に見捨てゝ逐電しぬ、土地の人は孫右衛門の平生を憎むが故に、誰一人として同情を寄する者も無く、只恐しき飢渴の影のみ茫々と彼等母子を見舞ひぬ

良人は入牢、家財家具を破られ毀たれ燒き失はれて、昨日富家の御寮人は今日乞食の境界に落ち、二人の子供を寒さうにかき抱きて、彼方此方を流浪し居たるが、心を限りなき悲嘆に打たれたると、皮膚を冷たき雨露に晒らされたるとに由て、あはれ重き病を獲つ、以前の屋敷跡に三五枚の破席を圍ひて、お米はその中に呻吟す、丸木の端を枕とせる右左には、お重お末が「母樣いのう〳〵」と泣き嘆き泣き悲む、この悲鳴を夢うつゝの中に聞きながら、お米は遂に死亡りき

「女房は死んだ、家藏は燒かれた、先祖代々粒々辛苦して作り上げた身代は

皆な奪られた、さうして私は無法の縲紲にかゝる、この恨み晴らさいで置かうか、この無念死んでも忘れるか、今に見よ、今に見よ」

獄舍の中に繫がれて、この無慘の狀態を聞ける孫右衛門は日ごと無念の齒を切ばりぬ、日ごと此の言葉をくり返へして、狂氣のごとく獄内を暴れ廻りぬ

此爲めに彼は更に深く役人の同情を失ひぬ、孫右衛門如き無法漢を牢より出しなば、いかなる珍事を爲出來さんとも限らじ、何日までもこゝに繫ぎて、强欲無慈悲の見せしめにせよ、とて遂に赦免の沙汰も無かりき

此事を聞きて孫右衛門の爲に一掬の涙を流せしは、孫右衛門の妹お菊を妻とせる同國伊勢原驛の茶商人宗兵衛なりき、宗兵衛は孫右衛門の身上、いかにしても聞き捨てなるまじきを思ひて、まづ二人の子供を引き取りぬ、續いて孫右衛門赦免の儀を願ひ出でぬ

されど大磯の代官所にては取り上げざりき、此方彼方を駈け廻りて、切て出牢の願ひだけにても貫徹せんと計りたれど、宗兵衛の眞心よりは孫右衛門

に對する憎惡の方深かりき

(五)

櫻町の陣屋へは今日小田原より上使來着あるべしとて、上下の混雜云ふばかりなく、人々はその待受の用意に忙殺されき、されど尊德は例の如く領内巡視、又例の如く門人見習生を集めて、仕法の講義に餘念なかりき

小田原公の命を受けて、此日陣屋の門前に肥えたる馬を乘りすゑしは、お側用人を勤むる山本藤助、年は四十を越えたる武士なり

尊德は出でゝ對面す

「御上意の趣き餘の儀でない、當時御領内駿河、伊豆、相模の所々に飢饉の風吹き荒み、食ふに米なければ山野に出で、草根を掘り樹の實を拾ひ、僅に飢を凌ぎ居るといふ、慘狀實に目も當てられぬ、速に來つて救濟の道を講ぜよとの御主意ぢや、有難くお受け召され」

藤助は尊德が快く君命を奉ずるならんと思ひぬ、されど尊德に其事なかり

き、彼は毅然として

「意外のお詞ぢや」と例の強く重みある聲「拙者は當地へ物見遊山に參り居るのでは無い」

「それは存じ、なれどこれは御國一大事、殊に君侯御召させとある、お聽き入れぐざらぬ喃」

「一向に其意を得ぬ、拙者當地へ參つて以來、千辛萬苦して再興安民の事を務むるは、君公の御委任御辭退致し難ぬる仔細あるからぢや、昨今凶饑、强ち御領内のみには限らぬ、當櫻町三ケ村にも救護の道立ち難ぬる模樣もあつて、夫是奔走、一寸の間も無い折柄、假令御上意ありといへど、即刻には參りかぬる、斯う申しては君命を輕じ奉るやうにも聞こゆるが、最初當地へ參る時のお約束にも、櫻町四千石興復の實を擧げぬ間は、いかな事情あつても歸りませぬ、おゝ當方からも召ぶぬぞとのお詞、よも御忘れなさせられる筈もあるまい、さるを今日急のお召し、然も櫻町御領内の窮民を捨て置きて、速かに出仕せよとの御上意、恐れながら殿樣御過失かと心得る、御尋ねの事ならば、當方へ御出なさせられ、拙者よりは決して參らぬ、貴殿御歸邸、拙者只今申したこと、一伍一什申し上げ下されえ」

尊德は例の如く閾に衣着せることもなく云ひぬ、藤助元來堪へぬ蟲抑へ難ぬ

「言語同斷、只今の御返答、家人として云ふべき詞では無い、假へ如何樣の事情ありとも、家人として君のお詞を用ひぬ法は無い、拙者譜代の御家來、殊にお側用人をも勤め居る、左樣な不禮の返答を齎らせて、御前へは歸られぬ、重きお咎めを受けぬ間、速かに江戸屋敷へ參らせられ、只今不禮の御口上、拙者一存に納め置くでぐざるに……」

「お手前などの存じた事では無い」と尊德は壓へ付ける樣に「憚りながら私の進退周旋は一として君命の重きに從はぬは無い、只今お詞に遊び奉らぬは、最初の仰せ付けを奉ずるからぢや、お手前元來殿樣お使ひに參つたのではないか」

「お使ひに參つたればこそ、御口上を傳へたのぢや」

「夫なら私の返事を聞いて何故歸らッしやらぬ、口上を傳へ、返答を聞いて、それを申し上げるが務めぢや、四の五の要らぬ、御返答の口上に不禮の罪あらば、そのお咎めは私が受くる、お手前のお知りなされた事でない、匆々歸らせ」

「勿論歸る、貴公などに武士の道を說いた所で仕樣がない、今日の樣子、具に言上する」

「それがお手前の役目ぢや、速かに歸らッしやれ」

尊德は斯く云ひ切りしのみ詞なかりき、藤助は盤を蹴立てゝ歸る

それと入れ違ひに、尊德の前へ出でしは、相州伊勢原驛の宗兵衛なりき

「先生久しく御意を得ませぬ、御機嫌よく在らせられまする」

「うむ」と尊德は莞爾して「宗兵衛か、久しいのう」

（六）

宗兵衛は曾て尊德に道を聞きて、一家の亂れんとするを整へたる事あり、その前に平伏して

「今日はお願ひがあつて參りました」

「何事ぢや」

「私妻の兄に、孫右衛門と申すがございまする、相州大磯驛に住みて、米を商ひ居りまするが、年來非道に金を貯めたるが災害の基となつて、先日以來無念の入牢を致し居りまする」

宗兵衛はこれを冒頭にして、孫右衛門一家に關る大慘事の大略を物語りぬ、

尊德は默して聞く

「强欲の誹は得て居りまするが、天下の法度を犯したではございませぬ、さるをお役人衆、一度のお調べも無く入牢仰せ付けられ、年を經るも御赦免の御沙汰ございませぬ、先生お力に由て出牢の儀協はぬでございませうか、可憐きは二人の子供、母には死別れ、父には生別れして、日ごとに痩せ衰へて參りまする」

「ぢやが是は一朝一夕の事でもあるまい、禍害の根元は遠き以前に胚胎して

居る、大家富豪の滅亡するは往々此の樣な例がある、これは人の力にも及ばぬ深い宿因ぢや」

「すると」と宗兵衛は落膽して「孫右衛門を救う道は無いでございませうかな」

「私はまだ孫右衛門に逢うたこともない、孫右衛門の系圖傳來はよく辨へぬが、初め金儲けを致した時、自然の道を失うた事ありはせぬかの」と尊德は考へながら云ひしが、「此度の大飢饉で、貧乏人の爲めに苦められた富家は澤山あるが、孫右衛門ほど種々の災害に逢うたものあるを聞かぬ、これで見ても、その災厄の根本の優れて深いのを知ることが能きる、お前今孫右衛門の家は代々穀物を商賣にすると云うたが、天明度の大飢饉には何を商賣にして居たの」

「やはり穀物を商賣にして居たさうでございます」

「必然爾うあらう、孫右衛門の先代は天明の飢饉に、米麥を高く賣て、不義の大利を得たに相違ない、お身は知らぬか」

「左樣な話、聞いたこともございます」

「人が災難に遭うた時は、爲きるだけの事をして救助の道を講ずるが人の道ぢや、それを人の愛ひに付け込んで、自分一人の腹を肥すは、假にも人間と名の付いたものゝせぬ事ぢや、禽獸でさへその仲間の悲鳴を聞くと、不思議に哀む心を見せる、それを孫右衛門は人にして禽獸に劣つた行爲をする、その天罰は覿面ぢや、今さらながら因果應報の眞理を感ずる、恐しい事〳〵」

と尊德は舌を吐きて云ふ

「お詞ではございますが、必定それに相違なくば、天明度から今日まで六十年餘りも天罰の參らぬ筈ございませぬ、神樣にも佛樣にも偶にはお脫漏があると見えます」

「其處に天理の妙がある、孫右衛門の遠い先祖には必ず陰德を施したものがあるに相違ない、今日まで孫右衛門が身を全うしたは、正しく遠祖の陰德に由る處、今孫右衛門が家を失ひ身を亡ぼしたは、陰德全く盡きて、先代のした惡心のみが、一的に巡つて來たのぢや、天地間の道理は一あつて二ない、

瓜を植ゑる時は瓜が生り、茄子を蒔く時は茄子が生へる、昔が今に至るまで、稻を蒔いて麥の生へた例を聞かぬ、孫右衛門ばかりが善を植ゑて惡の實る筈も無い、古い昔に一家滅亡の種を蒔いたから、今日に至つてそろ〳〵と實て來たのぢや、お前が親類の故を以て、その難義を救はうといふのは當然ぢやが、これぱかりは仕樣がない、お前はこれに鑑みて、後々子孫の代になつて、惡い實の生らぬやう、善い種を蒔いて置くのぢや」

尊德は斯く云ひ切りて、再び何事も云はざりき、宗兵衛は身慄ひするばかりに感じて

「御教訓はよく分りました、今にして孫右衛門の一身を救う道無いと仰せられるは、私の誠心が足らぬからではございませぬか、私先年お教へを蒙つた時、廢れた家を起すも、禍を未發に防ぐも、只一の誠がある斗りぢや、智慧分別にも、才覺力量にも、爲し難い大事でも、誠の一字には爲し遂げられると、沁々仰せられたのを記憶して居りまする、孫右衛門の災厄を救う道あらば、私いかなことでも厭ひませぬ、何卒一家の者を不憫と思し召されて、只一言の御教授を願ひまする」

宗兵衛の兩眼よりは熱き涙ぱら〳〵落ちぬ、尊德もその至情に打たれたるごとく頭を擡げ

「そなた一身に換へて、孫右衛門の災難を救はうといふ、その心はいかにも殊勝ぢや、然し細い細で大きい石は動かされぬ、これは諦める外あるまいぞ」

「ではございませうが、其處を何卒御分別下し置かれませ、先生のお袖に縋る外、孫右衛門を助ける道無いのでございます」

「こゝにたゞ一策ある」と尊德は詞重く「お前よくするか」

「何如な事でも致します」

「ちと難かしいぞ」

「いかほど難しうても厭ひませぬ」

「諾し、さらば」と尊德は身を前めて「お前の家内は孫右衛門の妹といふたの」

「御意にございます」

「肉身の情、最も同胞を深しとする、兄孫右衛門の捕はれたを聞いて、さぞ悲嘆に暮れて居やうの」

尊德の問は事ごとに意外なりき、宗兵衛は不審の眉を顰めつゝ答へぬ

「勿論悲んで居りまする」

「さらば聞くがお前の妻は、毎日何を食うて居るかのう」

「御飯を戴いて居ります」

「何んな物を着て居るかのう」

「普通の衣服を着て居ります」

「ちと食が減たか」

「其處までは氣付きませぬ」

「平生より惡い物を着て居るか」

「爾うはござりませぬ」

「もしお前の家内に、まこと兄の災難を悲む心あるなりや、食も咽喉へ通らぬ筈ぢや、美い衣服を身に着ける心も出ぬ筈ぢや、兄の孫右衛門は牢獄の中に泣き、實家の基礎は根本から覆つて、運命早や旦夕の間に迫る、それに常の如く物を食ひ、常の如く美い衣服を着て、口頭ばかりに心配するやうでは、眞實兄の災難を悲しんで居るとも思へぬ、どうぢやの」

宗兵衛は言句も無かりき、理の當然に攻められて、額に膏汗を流すのみ

「ぢやが相手は女ぢや、心に死ぬほどの苦勞を爲ながら、至極の道理を知らずに居るのぢや」

「何ともお恥しいことでござります」

「恥ぢ入るばかりが能では無い、お前が導き敎へねばならぬでないか」

「いかやうにも敎へ導くでござります」と宗兵衛は額の汗を拭ひながら「先生思し召を仰せられませ」

「別に難しいことは無い、生家の危急目前に迫つて居れば、お前の家内も兄同樣艱苦辛勞を俱にするやう云ひ聞けるぢや」

「お諭しに背くではござりませぬ、なれど孫右衛門は入牢中の身でござります」

「ぢやに由てお前の妻女も、牢へ入れられた心になるのぢや、孫右衛門は身體の自由を麻縄で縛られて居る、寒いからとて衣服を襲ねることも爲きねば、空腹いからとて食に飽くこともならぬ、人間としては悶な境界ぢや」

「私もそれを思うて泣き居ります」

「第一はお前の妻女が、生家から持て來た衣服調度、第二はお前の手許で買ひ調へた髪の物、それ等悉皆を賣却して孫右衛門の一家再興の助けにするぢや、その金は眞の些細の物であらう、柱一本壁一間に價するほどの事もあるまい、ぢやが私の仕法の上から云うと、この些細の物が一家再興の土臺になる、例へばこゝに一粒の米があると爲、蒔く時は一莖の稻を得るに止まるが、年月を經つ中に、幾萬倍の物となる、お前が歸つてこの話をする、お前の妻女がこれに同心、直ぐ衣服調度を賣却すれば、孫右衛門の身に誠が屆く、誠が屆けば改心する、改心すれば善に歸する、お上役人は鬼でない、善人を牢舍はなされぬ」

「有難うございます、お詞よく分つてございます」と宗兵衛は直と感じて

「只今のお諭を申し聞けたら、家内もさぞ歎ぶでございませう、何れ又改めて參上、今日はこれでお暇を致します」

彼はつど〳〵と禮を述べて、漸く座をぞ立たんとしたる、尊德呼び止め

「お前の妻女、具にお前の云ふことを聞いて、衣服調度を賣代したら、すぐ人を遣て孫右衛門に知らせるぢや」

「心得てございます」

「牢内の孫右衛門にこれを知らせる便宜があるか」

「便宜はございます」

「夫なら確ぢや、早く歸れ」

宗兵衛は歡び勇んで歸りぬ、翌日は雨、その翌日も雨、天も又時を傷ひ涙を下して、道に疎き世の人を警め給ふかと見えき

(七)

此日櫻町の陣屋へ不思議の男入り來りて、尊德に面會を求めたりき、當時

尊德の名四方に傳はりて、高きも卑きも其德を慕はぬものなければ、便宜を求めて對面を乞うもの、日に幾人といふ數を知らねど、今日の如く不思議に横柄なるはあらざりき

「私は不退堂ぢや、二宮金次郎に逢ひたうて參つた、すぐ執次げ」

黎き面、よく光る眼、高き鼻柱、玉を併べたるが如き齒、脊は五尺八九寸もあるべく、木綿縞の着物に、茶絹紬の胴服、鮫鞘の一刀を前半に佩したるが、玄關に立ちはだかつて傍若無人に斯く云ひぬ

執次に出でたるは百姓の萬兵衛なりき、奥へ入りて其旨を披露す、折柄尊德の前には富田高慶、福住正兄、その他の門人星の如く居並びて、例の報德談に耳を傾け居たり

「左樣な者に逢ふ暇はない、玄關から追ひ拂へ」と尊德は大聲なり

「不退堂が參つたか」と高慶は側から口を添へ「彼仁中々のしたゝか者でございます」

「お前知つて居るか」

「江戸でも大分噂でございました、以前は京都北面の武士、武道には深い心掛けもあるやに申します」

「私は百姓ぢや、武家に逢ふ用はない」

「その上能書の譽れでございます、人を人とも思はぬ丈、一かどの學者達でも、不退堂に逢うて泡を吹かぬ人無い氣にでございます」

「書字か」

「學問筆法、中々の巧の者と申します」

高慶は不退堂に一面の識もなければ、彼の名を聞くこと久しければ、多少は推尊の心にて云ひぬ、されど尊德は動くさまなく

「左樣な者に逢ふ要は無い、速かに逐ひ拂へ」

今は是非無し、萬兵衛は玄關へ立ち出でゝ、不退堂に面會謝絶の旨を云ひぬ、不退堂も然るもの、寂然として立ちたる儘なり

「逢はぬといふか」

「御用繁多、御對面は協はせられぬ、すぐ歸らつしやれ」

「私は歸らぬ」

「先生逢はぬとお云ひぢや、一たん御口外なされた事、お殿樣お詞でも聞かせられぬ、是非がない歸らつしやれ」

「先生がそれなら私も退かぬ、先生にお逢ひ申す爲め、遙々遠路を參つたのぢや、もう一度執次いでたもれ」

「何と仰せられても、これぱかりは協ひませぬ」と萬兵衛は頭を振り「私が申したのみでは無い、富田高慶樣もお執成下された、けれど一向に御承知ぞざりませぬ」

「不退堂に恐れたかの」

「歸らつしやれ〳〵、お殿樣からお召しになつても身動きもなされぬお方ぢや、氣に澄まぬ事は、どう云うてもお聞き入れなされぬのぢや」

「さらば是非ない、お逢ひ下さるまで待つと致さう」

「困つたこと云はつしやるのう」と萬兵衛は頭を掻き「然し限がござらぬぞ」

「一年が二年でも待つ、三年が四年でも待つ、先生に逢ふ外、今は用のない

身體ぢや」と不退堂はのそ〳〵と門前へ立ち出でしが「誰でもよい、これへ蓆を一枚貸して下され、十日か二十日絶食ぢや」

萬兵衛は不退堂の爲めに、一枚の新蓆を持ち來りて、門前の片隅に敷き遣りぬ、不退堂はその上に寂然と坐りて

「當分金二郎先生と首引ぢや、何方が勝つか、この勝負、ちよと面白いぞ」

後は大口開いてから〳〵笑ふ、その聲西吹く風に傳はりて破鐘を撞く如き響きなり

(八)

小田原公よりせる使者は再び來りぬ、加賀守殿口上に「前に其方を召したるは我の過失なり、其方の命に應ぜざりしは其處、今更過失を悔ゆるとも詮無し、今や小田原領内飢渇に迫りて、道に餓死の者を見るに至る、願はくは此地に來りて、窮民の爲めに救濟の道を開き呉れよ、これ我の願ひなり、一家中の願ひなり、切に賴む」とありき

されど尊德は尙容易く動かざりき「君命は謹んで承はる、御領內の慘狀此の如くならば一日も猶豫すべきにあらず、速かに歸國、救助救濟の道を開くべきなれど、只今は櫻町領民撫育の事に忙し、此地復興の事は十數年前の仰せ付け、小田原領內救助の事は今日只今の御命令、此地撫育の事終りて後、直に命に從ひて小田原御領の難に赴かん、御受けの返答此の外無い」と云ひたるのみ、復何事も云はざりき

使者は再び空しく歸りぬ、尊德は只管領內救恤の事に勉めぬ、彼が數年前よりせる用意は、今日の暗を照らす光りとなりて、櫻町領內に一人の飢民をも出さゞりき、櫻町領民の食量は、老若男女を問はず、一人に付き粟五苞を宛ふべき準備成りぬ、一人に粟五苞の所得は、平年豐作の時に優りたる收入なり

尊德にこの仕法熟したる時、小田原公の使者は三たび來りぬ、加賀守殿御口上は愈〻慇懃なり「さて金次郎、領內幾萬の百姓は前年來飢饉の窮乏を受けて、疲弊困憊限りなし、われ直ちに其地へ赴きて、興復安民の敎へを乞ふ

べきなれど、前日來風邪の氣味ありて思ふに任せず、櫻町四千石の領內はこの寒き冬の日に春風吹き滿ちて、人々みな太平の世を謳歌し居れりといふ、これ豈其方誠忠の示現ならざらんや、これ豈其方丹精の賜物ならざらんや、事體此の如くなれば、暫時の力を當領興復の爲めに分ち與るゝとも、何の仔細故障あるべき、匆々來着、疲弊の民を水火の中より救ひ與れ」

尊德は遂に動きぬ

「君命謹んで拜受、仰せの如く當領撫育の道も大體を得てござるに由つて、直に用意、一兩日中當地出發、御領內へ參着致すでござる」

使者は鬼の首級を得たる如くにして歸る

「先生、いよ〳〵御出發でござりまするかな」

と高慶は膝を進めぬ

「再三の御使者、此上參らぬは不忠ぢや、當地仕法も大略は調うた」

「私共も滿足に心得まする」

「小田原御領內は十萬石ぢや、道も廣く行はるゝ」

「而て何日御出發でございます」
「まづ明後日の心で居る」
「御出發前に不退堂を御教訓なされてはどうでございます」
「彼奴まだ在るか」
「今日で二七日の間、食はず飲まずに御門前で待つて居ります」
「しぶとい奴ぢや、逢うて遣る、伴れて參れ」
高慶は尊德に逢はんとして、一年有餘を留吉の家に待ち暮らしたることあり、我身の辛かりしに引き比べて、不退堂を同情ること深かりき
高慶は不退堂の前へ出で「先生御對面あらせたまふ由」を告げぬ、不退堂は白き眼を擧げて
「存外早かつた喃、私は一月位斷食と觀念して居た」
「長々斷食、お疲れはござらぬか」
「一月や、二月物を食はぬとて、疲れるやうな身體では無い」と云ひながら直然と起ち上る、いかさま疲れたる態度も無し

彼は高慶に伴はれて尊德の前に出でぬ、不退堂の面上には負じ魂現はれぬ、二七日の間も門前に捨て置きて一言もくれざりし尊德何者ぞ、一論吹きかけ、目に物見せて呉れんづ、との心あり〳〵と眉の間に現はれぬ
尊德は儼然たり、その眼は鋭く不退堂を射て、彼の心の奥底を貫かんとし、ぬ、不退堂は無手と坐る、尊德の聲は厚き唇を迸る
「お前學者か」
頭上より熱湯を浴せたる如き問なりき
「學者では無い、只文字を知るばかりぢや」
「うむ、書知というか、さらば茄子といふ字を知て居るか」
「存じて居る」
「知つて居るなら書いて見やれ」
「何でもない事ぢや、門人筆を貸さぬか」
一門人は筆と紙とを取りて與へぬ、不退堂は得意の一揮「茄子」の二字美事に書かれぬ

「それは字ぢや、茄子と讀む」

「いかにも」

「茄子が前に生きたか、字が前に作きたか」

不退堂この一言に鼻柱を挫かれて、忽ちぐつと口籠りぬ、これを初對面とせる不退堂は遂に尊德の前に膝を屈して、上なき報德宗の門人となりぬ、報德宗の行はるゝ地、至る處として不退堂筆の「報德訓」を見ぬはあらざらん、これやがて尊德の面前に茄子の二字を書きたる筆なり

(九)

身に溫き袍を着、手に溫き爐を抱へても、尙堪へ難き冬の日を、多くの囚人は開け放したる鐵窓の下に屈みて、氷るが如き風の習々と吹き入るを、互の身體もて掩ひて、僅に暖を取り居れるなり、放火、强盜、殺人、有らゆる罪科を犯し來れる惡人の間に、彼の孫右衛門も交りて、堪へ難き怨、忍び難き怨怒、罪なくして牢獄の苦を嘗むる口惜しさ、嵐の如く吐く息に見え、朱の如く血走りたる眼の中に燃えぬ

「孫右衛門、出ませへ」

牢番は外より叫びぬ、牢名主は幾枚かの畳敷きたる高き上より聲かけ

「孫右衛門御用と仰せぢや」

孫右衛門は「はつ」と答へて、板間の上へ膝行出でぬ、牢番の聲は續いて起る

「對面願ひぢや、長うはならぬ、お上お慈悲を有難う受け」

「有難き仕合にござります」

心に堪へ難き怨みあれば、孫右衛門は何を云ふも上の天なり、眼を細うして格子の外をさし覗けば、其處の土間に悄然として立つ男、見忘れもせぬ妹婿宗兵衛の兄芳助なり

「芳助殿か」

聲は微れて、まづ怨氣のみ前に立つ

「おゝ」と芳助はすり寄つて「孫右どの、さて久しう逢ぬ、此度の大變、何

から慰めう詞も無い、さぞ不自由でおはさう」

「この怨みは忘れぬ、私は身に一點の罪科も無くて、此樣な處に繫れる、世界は廣く、人間の數は多いが、罪無くて牢舍の苦を見るものは私一人ぢや、無法とも無法、不仁とも不仁、この怨みは必然返す」

「夫を云はつしやるな、お前がこれを云はつしやるで、自然お上のお怒りも解けさせられぬ、理非は天道樣が御覽、天理に從ふものは榮え、天理に背く者は滅る、何事も運命、罪無くして牢舍となるも、此方行爲に缺ける點があつたからぢや」と芳助はまづ孫右衞門の心を引き立てる樣に云ひしが「其處でお前に歎ばせる事がある」

「もう〳〵」と孫右衞門は耳を閉いで「何事か知らぬ、けれど私の身に歎ぶ事のある筈は無い、家屋敷は毀たれ燒かれ、妻子眷屬は四散八裂になる、揚句の果は牢舍、免された處で當然、妻子一類從前の通りになつた處で當然、歎ぶべき事ではない」

「さう一我意に云ふたものでは無い、財や家や田地の外に、歎ぶ事はいくら

もある、まづ聞かせたいは、お前の妹志ぢや」

「妹が何うしたの、暴民の爲めに掻き攫はれた米の一俵も取り返したかの」

「爾うでは無い、何よりも嬉しいは肉身の心、そなた一家の大難、災害を苦に病んで、食ふ物も咽喉へ通らぬといふ」

「私は食ひたうても食ふ物が無い、其位の事當然でござります」

「當然と云はつしやるな、他人の涙には血が交らぬ、お前の妹御は少しでもお前に安堵がさせたいと云うて、長の年月命よりも大切に持たれた衣類悉皆を賣たぞよ」

「え、妹が……」

「衣裳ばかりでは無い、櫛笄簪長持有りたけの物悉皆を賣代したぞよ」

「え、妹が……」と流石の孫右衞門おろ〳〵して「賣りましたか喃」

「身に着けた一枚の布子を除く外、有りたけの物皆賣た、それを何の爲めと思はつしやる」

「……」

孫右衛門は詞無かりき

「皆なお前の爲めぢやぞよ、お前の家の樣見るに見難ね、お前の子供の樣子見るに見難ね、眞の九牛の一毛なれど、切て補助にしたいと云うて、惜げも無く賣代したぞよ」

「……」

「お前の同胞親類は、皆なお前の苦痛を救はうと思うて、能きる限りの眞情を盡して居る、それに肝腎のお前がお上樣を惡口、罪に罪を重ねるやうな所爲して呉れては、妹御の苦心も水の泡ぢや、私や弟や一家一門夜の目も寐いで苦勞しても、此眞心は天に屆かぬ、長い物には卷かれぢや、何故優和しう御赦免の御沙汰を待たつしやらぬぞ、犯した罪があつてさへ、何年何月入牢すれば期限滿ちて娑婆へ出られる、況してお前は犯した罪が無いでは無いか、唯お上お怜しみを受けたばかりで、日の目も拜めぬ無慘な姿になつて居るでは無いか、されば少々の慎みで御赦免が必然ある、妹御不憫と思はつしやるなら、お上を恨むことさつしやるな、肉身の子供可愛いと思はつしやるなら、

二度今のやうなこと云はつしやるな、お前の子供は毎日々々お前の歸りを待て居るぞよ、明けても暮れても、父樣々々と云ひ縋けて、奉行所の御門前をうろ〳〵として居るぞよ、好い加減に角を折らつしやれ、お前は心に生えた角でお前の肉身の胸を貫かうぞよ」

芳助は云ひ掛けて目を屢叩きしぬ、彼は自の詞に感じて、自ら涙を流せるなりき

情惡き草も春風の溫きには芽を生く、孫右衛門も人、格子の棧に縋り付きて

「惡うございました、私が惡うございました」と孫右衛門は咽ぶが如き聲、

「恥ぢ入ります、妹の心に愧ぢ入ります」

「これでお前の心が直れば、その眞がお上へ屆く、すれば今にも御赦免ぢや礫握る手に花は持てぬが、珠數掛けた手は月が掏へる、よう考へさつしやい、又來やうぞよ」

芳助は斯くして去りぬ、後には寒き風一類り吹き暴れて、鼻汁を啜る聲淋

しく聞こえぬ

（一〇）

暫時して孫右衛門は赦免となりぬ、深く悔ひ深く愧ぢて、再び上を怨み、人を憤る事無く、他くまで謹慎の意を表したるが爲めなりき、深く芳助の詞に感じて、日夕獄中の規則を遵守せるが爲めなりき

孫右衛門赦免と云ふ時、代官所役人は深く後來を警めぬ、再び貪婪の爪に火を點すこゝろあるべからず、再び諸人の迷惑に乘じて不義の利を貪るべからず、道に外れたる行爲あるまじく、宿役人を敵にして爭論致すまじく、萬事生れ變りたる心になりて、家名再興を期せよとなりき

此時ばかりは孫右衛門感涙をしとゝ流して、委細畏み奉る旨を答へぬ、三年越し浮世の風に中りたる事無き身を、濱の松風どう〳〵と吹き晒らされて、奉行所の門を出で來る時

「父様いの、父様いの」

飛び立つやうに呼びて、左右の袖に縋り付くはお重お末二人の娘なり、三年見ぬ間に見違へるほど大きくは爲りたれど、顏の色は蒼ざめ、身の肉は痩せ、見る影も無く衰へたる上に、繼剝せる着物着たる姿、乞食よりも劣つて見ゆ、これが孫右衛門の娘か、宿中の豪家では五本の指に折られたる孫右衛門の子か、と思ふにつけて、口惜し涙霰と玉走る

「おゝお重か、お末か、二人とも優和しう成人、して迎ひに來てくれたの、父が牢を出るからは此樣な疎末なもの着せて置かぬ、ちやつと家へ歸らう」

慈悲知らぬ人の心にも、子の可愛さは深かりき、二人の娘を兩袖の下に抱きて、淋しげに歩み出す折柄

「まづ無事の顏見られた、さて芽出度い」と茶店の葭簀を立ち出るは、妻お米の父宮原屋與右衛門なり、與右衛門は相州浦賀の富豪、孫右衛門を婿にするだけ、其心は欲に光りぬ、年は六十に近からん、白銀を置きたる如き頭髮、然も朱を固めたる如き唇

「こりや與殿、お迎ひ下されたか喃」

「今日は出牢と知らせが來たので、取る物も取り敢ず駈け付けた、家で待つも待ち遠い、老人の氣急き、孫に引かれてこゝまで來た、三年越しの入牢、變ることもなくて幸福、家には宗兵衛殿兄弟來合せ、何かと用意、待ち受けて在らせの樣ぢや」

「何から何までお雜作を掛けます、天災とも何とも申しやうのない成行、生命のあるのが不思議でございます」

與右衛門を前に、孫右衛門は二人の娘の手を引きつゝ、徐々と歸り來る、稻村蔭、民家の軒、此處彼處に群せる土地の子等は手を拍き、鯨波を擧げて

「やア鬼が通る、鬼の子が通る、この鬼の角の無いが不思議ぢや」

一人の云ふを他の一人は引き取りて

「角の無いに不思議は無い、角は皆な胸の中に生えて居るわ」と大聲なり

「胸の中に角がある、こりや不思議、さても不思議」と一同が聲を揃へて

「わアい〳〵笑うてこませ、大きい聲で笑うてこませ」

「お重お末は羞しさに垂頭きて悄々通る、その足の前にぽと〳〵落つるは涙の露なり

「こりや〳〵」と孫右衛門は白い眼を剝き「汝等何を云ふ、鬼とは何ぢや」

「や、鬼が目を剝く、恐いぞよ〳〵」

「その口で娘共窘め居らう、憎い奴、その分でさし置かぬ」と礫取りて振り上ぐる、その石よりも早く散り散りに逃げ行く子供の後見送りて

「親父樣彼でございます、親が親なれば子供までが彼通り私共を苦めます、私が何の鬼、罪も報も無うて牢へ入れられるが鬼なら、人の財寶を斷りも無く持ち出し、罪も報いもない女房子供を苦め、おまけに家屋敷を打ち毀して、强盜の仕術をする土地の人は何でございます、惡魔か、羅卒か、それとも狼か、巨蛇か、とても人間ではございまぬ」と云ふ中に熱湯の如き涙、泡の如く襟に傳ふ

「もう夫を云はつしやるな、云ふた處で仕方が無い、人は人、自分は自分、鬼と呼ばれうが惡魔と云はれうが、心さへ眞直なら恥づるに及ばぬ、それよりはまづ家へ歸らつしやれ、家へ歸つて屋敷の樣子を見さつしやれ」と與右

衛門は恨み聲にて云ひしが「私も助太刀、此敵はきつと討たつしやれ」

「えゝ」と孫右衛門は天にも響く聲を出して「討ちませいでかいの、報いませいでかいの」

「お重お末は白き眼に父を視上げて、

「父様、早う歸らうの、今に又惡口好きの男の兒來ませうにの」と袖を引く可愛き聲に催促せられて、孫右衛門は歩み掛けぬ、宿中の風光、家々の店飾り、海の音、風の聲、三年前に變る事なけれど、さて變りたるは我家なりき、半町四方を取り圍みて、白壁の塀に夕陽の光り差明く幾棟の甍の上に黄金を敷く朝日の影美はしく建てられて、假し濱邊の波の絶ゆる時はありとも、孫右衛門の身代の搖ぐ時はあるまじきを羨まれたる家は、柱一本殘る方もなく燒き盡されて、跡には枯草物淋しく、その上を寒き風吹き渡る、僅に殘りたる一戸前の土藏も、壁は落ち、屋根は頽れて、見る蔭も無く荒れたるが、それを力に形ばかりの板庇して、骨もなき障子、縁も無き疊、僅に膝を容るべき小屋の中に、子供の膳部散亂して、獄牢にもあるまじき惡き臭ひ襲ひ來る、幾百千金を擲ちたる泉水築山は影も止めず、廣き屋敷跡に青き樹一幹も殘らず、淋しき日影の照り遍きを見たる時、孫右衛門の腸は寸々に引き裂かれぬ、孫右衛門の胸は憤怒の焰烈しく燃えぬ、彼は敷居の外に立ちて、石像の如く身動きせざりき、彼は内外の樣をつく〳〵見て、その目を直に朱にしたりき、彼は詞も出でざりき同時に涙も出でざりき

（一一）

「兄さんお芽出度うございます」

裡より聲を掛けて、入口に出迎へるは茶屋の宗兵衛なり、にこ〳〵と笑ひて

「私も、彼方までお出迎ひに出でやうと存じたが、家を空けることも爲らないで、こゝにお待ち申したぢやよ、三年の御辛抱、大體の事ではあるまいに、破れても我家ほど好い處は無い筈、此處へ入つて足腰をお伸しなされませ」

勸めて兄の心を慰めんとすれど、孫右衛門は物も云はざりき、黑ずみて厚

き唇をぴり〳〵と慄はせ、聞く凹みたる眼を光らせて、瞬きもせず天の一方を見詰め居たり

「もし兄さま」と宗兵衛は又呼び掛け「色々お話もございます、浦賀のお父様もお越し、二人の子供も何れほどお待ち申したか知れませぬ、此方に御膳の用意、何は無くとも二種三種のお下物も調へて、あなたのお歸りを待ち暮らしたのでございます」

孫右衛門は夫にさへ答へ無かりき、彼はその耳に妹婿の溫き慰安を聞くよりも、目にこの荒凉たる家の樣を見るに忙しかりき、幾十年來血と膏とに貯蓄へたる黄金庫に礎のみ殘りて、名も無き草の枯る下に、寒風は淋しく吹く、以前の家を其儘に形りて、目前に持ち來るか、もしくはそれに價すべき多くの黄金を與うるにわらずば、孫右衛門の心は慰む由なかりき、宗兵衛が滿腔の同情を披瀝して、能きる限り溫き詞を出すとも、その詞に黄金の光り添はぬ上は、孫右衛門の耳を樂ますべき要も無かりき、彼の恨みは骨に徹しぬ、彼の憤りは血に燃えぬ、彼は切ばれる齒の間より

「父樣」と飛走りたる聲「私、これほどであらうとは思うても見ませぬ」

是程ならんとは思ひ掛けざりき、との一語、此時の孫右衛門の心中を隈もなく照け出しぬ、慘澹たる家の樣を胸の中に描きて、斯くあらん、斯く〳〵あらん、と想像せるよりも、實際の家の狀態は更に慘澹たりき、自個が極端に想像せるよりも、實際は幾層倍の慘狀なりき、彼はこの狀態を見ると共に、牢内にての決心も忘れぬ、妹が健氣に衣裳を賣り、調度を裳き、兄と思へばこそさま〳〵に苦勞し呉れたる事情を聞きて、一たん鎭りたる怨怒の火の再び烈しく燃え出でしを感じぬ、驛の人も餘りなり、驛の役人も餘りなり、我に何んの罪科がある、我に何の落度がある、この不平の情は忽ち黑き雲となりて身を掩ひぬ、忽ち恐しき霧となりて身を包みぬ

「私の家内はこの茅屋の露と消えたのでございまするか、私の子供はこの茅屋で乞食の月日を送つたのでございまするか」

「何んとも云ひ樣のない事ぢや、私も最初見た時は膽を潰した」と與右衛門は云ひながら「それぢやもの、お前の驚くは有理、まづ内へ入らつしやれ、

恰度宗兵衛殿もお越し、後々の相談も爲やうでないか」

「私に何んの罪があるのでございます、私に何の咎があつて、こんな制敗を受けるのでございます」

「ぢやに由て、仇討をさつしやいと勸めるのぢや、これではお米も浮ばれぬ」

「家内も難義苦勞したでございませう」と曙つた眼から涙を流して「不憫なことをしてございます、驛の奴等が殺したのでございます」

「勿論さうぢや」と與右衛門も涙にくれて「土地の者は人殺の罪人ぢや」

「その罪人に構ひは無うて、正直一遍に暮らす私が、却て牢へ入れられる、此樣なお處刑が唐土にもあるものぢやございませぬ」と涙宛ら湧くが如し

「もし、それを被仰つては爲りませぬ」と宗兵衛は心を付け「お役人のお耳へ入ると、又お身の上でございます」

宗兵衛の眞ある詞は絶えて孫右衛門の耳に入らざりき

「人殺を人殺といふ之れが何ぢや」と孫右衛門は突掛るやうに「惡人を御制敗、善人の財寶や生命をお守り下されてこそお上ぢや、人殺の肩を持つて、善人を苦める、そんなお上が何處にある、そんなお上が何故恐い、私はこの恨み報はにや置かぬ、此恨み報うて川崎屋の暖簾再興せにや置かぬ」

「最も爾うぢや、誰が何と云はうとも、私はお前の加擔人する」と與右衛門は薪に油を注ぐ如く云ひ「確乎遣らつしやれ、誠實の無いお上は狼よりもまだ恐い」

「狼は退治します、きつと退治してお目に掛けます、人間も此ほどの目に遭うて、一言の恨みを云はず、驛役人の云ふ通りになつて、へえ〳〵と頭を下げる馬鹿漢はございませぬ」

「兄さま」と宗兵衛は血を絞る聲で「皆な災難でございます、前の事をお忘れなされませ、胸の恨みをお忘れなされませ、今までの事を全然忘れて、正直律義にお働きなされませ、その中には必然天道のお守りがございます」

「天道が當になるかよ」と孫右衛門は一言に云ひ斥けて「私は此分で置かぬ氣ぢや」

（一二）

僅に膝を容るゝ程の座敷一ぱいに、孫右衛門待受の酒下物は處狹きまでに併べられぬ、お重お末は行儀よく坐りて、樂く父と食膳を共にせん心あれど、孫右衛門は抑へ切り難き忿怒の爲めに、二人の子供さへ眼に入らざりき、有る限りの鉢物汁物に餓鬼の如く手を付けて、むしや〳〵と食ひながら

「父樣、今に御覽なされませ、今にこの仇を報て見せます」

「そりや當然、敵打の助太刀には、私がちやんと付いて居る、まさか違へば浦賀代官所のお力を借ても、お前の一分は捨てさせぬ、お前は婿殿、二人の子は孫、身代の半分を棒に振らうと厭はぬ氣ぢや」

「そのお詞を聞いて、私も心强う思ひます、何のあなた、驛役人に退を取る私でもございませぬ」と孫右衛門は昂然たり

「確乎遣らつしやれ」

「遣る段ではございませぬ」

宗兵衛は二人のこの物語を聞くごとに、宛ら胸を針さるゝ思ひなり、孫右衛門を牢より救ひて、今日こゝへ迎へるまでには、幾度人知れぬ涙を拭ひたるかも知れど、幾度二宮先生御助言を乞ひたるかも知れど、然も義兄の心斯くの如く、與右衛門の煽動斯くの如く、再びお上役人の憎惡を買うことあらば、三年越の苦勞苦辛も水の泡、二宮先生御教訓も畫餅、併せて妻が嘔血の至情も何の甲斐無きに至らん

「もし」と宗兵衛は堪へ難ねたる聲「ちとお慎みなされませ、あなたはまだ御出牢なされたばかりでございます、そのお手に繩は掛らいでも、背後にはお役人の眼が付いて居ります」

「お前はそれほど役人が恐いのか」

「片手に劍を提げて、片手に人の膽を握らしやる鍾馗樣を恐れぬ者はございませぬ、お前樣が仇々と大きい聲でお叫びなされいでも、道に外れた行爲のある者は、きつと天道樣の御罰がございます」

「手緩い天道が待て居られるか、私は自分に辛い目を受けて居る、自分の仇

を自分で討つのに誰が何と云ふものか、お前は自分の家が全うあれば、親類縁者は何うなつても構はぬといふ人ぢや、私は聞かぬ」

「兄様、それが永々苦勞をして、あなたを此までお迎へ申した、私へお禮のお詞でござりまするか、いや私はどうなつても厭ひませぬ、あなたに何と云はれても怨みに思ふことはござりませぬ、あなたのお身がお幸福で、川崎屋の暖簾が細々でも立て行けば、それで本望でござります、今日の御酒はあなたのお胸に修羅を燃やす爲め調へたのではございませぬ」

「私の身の幸福は去つた、川崎屋の暖簾は破れた、私は是から惡鬼になつて、私に辛うした惡人共を食ひ殺す」

悲風蕭々と軒端を撲ちて、凄氣座中に漲りき

「私、惡いことを云ひませぬ、仇打つなら仇打つお心で、二宮金次郎先生の教へをお受けなされませ、天道様御差配を待ち遠しいと被仰るなら、すぐ御利益のある活神様をお紹介致します」

「二宮金次郎とは聞いた事がある、小田原邊の百姓ぢやないか」

「以前は百姓でも、今では北條様の御家人格、野州櫻町で活神様と尊まれて、お在でなされます」と宗兵衛は膝を進めぬ

「その金次郎が私の助太刀をして呉れやうか」

「此方の事情打ち開けてお話しなされたら、きつとお助け下さるに違ひござりませぬ、斯ういふ私も金次郎先生の教に由て活き、金次郎先生の教に由て、家を整へた事ございます」

「その活神、何の様な利益を下さる」

「御利益は廣大無邊でござります、第一は誠を以て百姓を撫育あらせられます、第二は誠を以て荒地をお拓きなされます、御本體は仁恕、御本願は慈悲の二字でござります、それで難澁困窮の輩へは無利息で金子を御貸出しになります、兄様只今の窮狀、前後の事情、悉くをお物語なされたら、千兩の金子をお貸しになります、その千兩を資本にして、然るべき商法開業、誠の一字を暖簾に替へて、精々お働きなされたら、家運再興瞬く間でござります」

「巧いことを云ふのう」と孫右衛門は能くも信ぜず「人を突き倒しても自分

の利を獲やうとする今の人情に、無利息で金を貸して、見ず知らずの者を助ける者があるか、お前は昔から人の云ふことに乘つて可けぬ、今の時節を何ういふ時節と思はつしやる、罪もない者が牢へ入れられ、殺人、放火、盜賊、有らゆる惡事を爲る者が、大手振て町中をのさばり歩く世の中ぢや、牡丹餅で頬を叩くやうな事が落ちて居てたまるものか」

「兄樣はまだ金次郎先生の德をお知りなさらぬ、僞言と思し召すなら、逢うて御覽なされませ、佛樣の御本體は、御內陣を拜むものが知つて居ります」

宗兵衛は憤怒、嫉妬、怨恨、忿懣の氣に圍繞せられつゝ、惡鬼の如く世と人とを呪んとする義兄の心に、溫き血を注ぎ入れんとして詞を盡しぬ、孫右衛門は胡麻鹽の頭を左右に掉りて、

「馬鹿なことを云はつしやい、利息取るのを家業にする高利貸でも、私の今の有樣を見て、一兩の金を貸す者は決してあるまい、それに千兩の金を無利息——お前も好い年をして詰らぬこと云はつしやるな」

「四の五の云ひませぬ、まア逢うて御覽なされませ」と宗兵衛は强て爭はず

「金次郎先生には、私も十年以來御厄介になつて居ります、兄樣の事を詳し申し上げ、お救ひを願つて見て、もしお聽き入れ下されたら、此上も無い歡び、萬々一兄樣のお云ひなさる、無慈悲不仁義のお方であつたら、その時、話をお止めなされても遲いことはござりませぬ」

「野州櫻町まで空歩を踏まずとも、雪が白く、炭團の黑いことは見えて居る、もう何んにも云うて呉れるな、私はお前の仁義らしい口上を聞く暇で、仇の腦天へ穴を穿ける工夫をする」と白い眼を與右衛門に與れて「のう親父樣」

尊德の大慈悲大仁義も、人傳にては人を動す力無かりき、宗兵衛は長大息、二人の子供は恐しげに父の顏覗き見る、日は暮れかけて北風に鴉の鳴く音頻りなり

君臣元是一つのみ

凡そ上、君となり、下、臣民となるもの、本來一物にして二物にはあらず、譬一本の根幹枝葉相離れざるが如し。故に本根枯る、時は枝葉萎り全からず、枝葉枯るゝ時は本根も亦全き事を得ず。

（答　語）

第三章

（一）

泰山は動きぬ、赫灼たる日は今しも十方世界を遍照するなり

「三五郎何處へ行くよ」

縞の着物ながら新らしきを着て、未剥過ぎたる冬の野道を、空手で通る一人は呼びぬ、一間ほど前を垂頭き勝に行く老人は見返り

「何處とて庄屋殿の家へ行くわさ」と尖り聲に云ひつゝ「此方は」

「私も同樣ぢや」

「やつぱり報德の說敎聞かうぢやの」

「貧い時のお餘しは、飢餓えた時の米の飯も同樣ぢや、鋤鍬で米を作るな、一心の誠をもて田を作れとのお言葉、私は彼を聞いた時、腋の下へ冷汗が流れたよ」

「今日は天智天皇お歌のお話を爲て下さるさうぢや、急いで行かう」

「甘露は一滴も飲み外して爲らぬからのう、爲になるお話は一言半句聞き落すと可けぬでのう」と三五郎は急ぎ足なり

「や、前頭から人が大勢來る、何ぢやあろ」と一人は立ち止る、三五郎は見て

「ほう、二宮先生ぢや、報德の先生ぢや、村中をお廻りと見える、庄屋殿も在らせられる、下新田村の小八も居る」

「いかさま先生ぢや、早う行てお供せう」

眞に尊德を敬ふこと神の如く、尊德の德に懷くこと、蟻の甘きに從ふが如くなりき

尊德は小田原公の命を奉じて、先頃より御領內疲弊、凶歲饑饉の後を享けて、困窮の底深く沈みたる百姓を救濟すべく村々を巡廻して、それ〳〵再復興隆の道を立てたるが、數日前より相州足柄上郡竹松村に來りて、熱心に報德の道を說き聞かすなり、報德の道弘く行はるゝはやがてその土地、その村の再興復活を意味するなり、尊德は夜を日に繼いで、安民富村の道を講ず

「御苦勞さまでございます〳〵」

人々が口々に云ふを聞き流して、尊德は村盡處の只ある農家へ入りぬ、家は廣けれど汚穢なる事云ふばかり無し、主人の太右衛門、妻のお信、倅太吉、皆入口に跪く

「これはお前の家か」

「左樣でございます」と太右衛門は恐る〳〵「年々の凶作、家の事までは手が屆きませぬで、此通り荒れるまゝに荒れて居ります、何んともはや面目次第も無い事でございます」

尊德は家の樣をずつと見廻し「穢いのう」

「一向に掃除行き屆きませぬで、折角の御巡廻にも、お茶一つさし上げることも能きませぬ」

「これでは何日までも貧乏神の住居ぢや、そなたは貧乏神が好と見える」

「いえもう貧乏には飽々したのでございます」

「それなら何故もちつと綺麗にせぬ、福の神は不潔い處が大お嫌ひぢや」

「へえ」と太右衛門は頭を下げて「此後を心掛けます」

「これでは貧乏神の宿になるばかりで無い、疫病神も出て參る、疫病神は斯ういふ家を探し廻つて居るのぢや」

「此上疫病神に來られましては、私立つ瀬がございませぬ」

「それに居るは倅か」

「倅太吉でございます、以後をお目掛けられて下さりませ」

「幾歳に爲るの」

「十八歳になります」

「十八歳の倅が、庭の草一つ採らぬ法は無い、怠惰漢の頭に温い日は照らぬものぢや」

「何とも恐れ入つたことでございます」

「是から氣を付け、貧乏神や疫病神の潜む處無いやうに致せ、肉が腐ると蛆が生き、水が腐ると子子が生く、人間もその通りぢや、心が腐ると罪咎を生じ、家が穢れると病氣が起る、これは當家の主人ばかりに云うで無い、一統がその心得、庭の草を苅ると共に心の草を苅り、家の塵芥を拂うと共に心の塵芥を拂ふぢや、庭に草無ければ蛇蝎の潜む處無く、家に汚穢い物なければ汚蠅の集る恐れも無い、貧乏は天から下るのではなくて人が招き、病氣は神から授かるので無くて人が作る、正直に勉めて怠らねば、幾年の飢饉が續いても恐れるに足らぬ、車も長く使はねば錆び、人も長く怠惰けると骨が損じる、皆が忘れる喃」

尊德の言葉は鋭き針の如く、後に附隨せる庄屋、肝煎、世話方、村役人の胸の底を刺すなりき、太右衛門父子は大地に額をすり付けて、漸く夢の覺めかけたる目を閉りたるまゝなりき

尊德は太右衛門の家を出で、その隣豐松の家に入りぬ、狹けれど美しく住み成して、庭に打水の痕清く、小き前栽に寒牡丹色好く調ひて、香氣馥郁と傳はり來る、豐松、その妻、門前に出迎へて、殊勝氣に平伏したり

されど尊德は家の中をさし覗きたるのみにて、一歩だも入らざりき「よしよし」と云ひ捨てゝ、次の家へ移らんとしぬ、庄屋幸内前に跪きて

「先生へ伺ひまする、只今の家主人を豐松と申します、掃除行き屆き、庭の手入れ美しく、天晴れ善く住み成してありまする、彼では貧乏神の來る氣遣ひ無いと心得ます、先生思し召し何のやうでござりまする哉」

「貧乏神よりは恐しい、彼の家には惡魔が居る、惡魔には手が付けられぬ」

「へえ」と幸內は不審して「惡魔と申しまするは」

「百姓の惡魔は酒と博奕ぢや、豐松は博奕をする、見やれ、彼の家には此といふ農具が備へ付けて無いで無いか、百姓の家に農具が無うて、何を基に暮らしを立てる、家ばかりが綺麗でも、心に穢れがあつては爲らぬ、左樣な家へは得手して惡魔が入り込むものぢや、百姓の罪人は是、決して交りを結んでは爲らぬぞ」

幸內は言句も無かりき、人々は皆な尊德の明察に感ずるのみなり

豐松は此邊に爪彈きせらるゝ博徒なりき

（二）

竹松村の庄屋幸內の家に於ける濟世救民の說敎は、この日も村內の巡視を終りて後に開かれぬ、近鄕近在より集まれる熱心なる信者は、座敷、出居の間、納戸、次の間、盡所までも居流れて、一圖にこの有益なる談話を聞くなり、尊德の譬話は平易なる詞をもて、比較的高き意味を說く、これ彼の生命なり

「今日はお約束に由つて、天智天皇歌のお話をする、此處へ集つて居さつしやるほどの人、秋の田の苅穗の稻の苦をあらみ、我衣手は露に濡れつゝ、のお歌を知らぬことはあるまい、然しお歌を知てもお歌の心を知たものは無からうの、お前達ばかりでは無い、一かどの學者でも歌讀でも、このお歌の心を十分に會得する者は無い、何事に由らず、その物、その事、自分の力一ばいにより解せぬものぢや、私が思ふに、春夏は百種百草芽を吹き、枝繁り日の力、土の力、天地陽氣の力に由て、ずん〳〵と生ひ育ち、美しい花を着け、香しい匂ひを漏らすが、秋から冬へ移つて來ると、實が熟して葉が落ち、幹も枯れ根も絕ゆる、これが植物の終り、又事の最後である、人間に譬へて云

うと、奢る者が亡び、惡人が世を狹められ、盜人は處刑に遭ひ、善人は人々から敬はるゝ一生の業の果と同じぢや、それを秋の田に寄せての御製、とまを荒みとは政行き屆かず、民百姓の家々もさぞ荒れ果てゝ居るのであらうと、御慈悲御憐愍の御心を籠めさせられたものぢや、世には重い罪を犯して、獄門に處せらるゝ者もある、我衣手は露に濡れつゝ、世には火炙釜入の刑に遭ふ者もある、我衣手は露に濡れつゝ、世には家事不取締の爲めに、蟄居申し付けられる武士もある、我衣手は露に濡れつゝ、世には年貢の金に詰つて、最愛の娘を苦海に沈める者もある、我衣手は露に濡れつゝ、と斯う御嘆かせなさせられたのぢや、大罪を犯して刑罰に遭ふのも、奢に長じて家を滅するのも、要りは政が行き屆かぬからであると、尊く有難い大御心から、御袖を絞らせ給ふとの御歌、皆がその心で讀誦すると、一首のお歌も深い敎への種になるのぢや、予が初めて野州物井村を見廻つた時は、いやも口には云はれぬ程の有樣、民百姓は離散して、只住み荒した家のみが殘つて居た、それも長年立ち腐り同樣になつて居るので、石据ばかりが殘るのもあり、又井戸ばかりが草の中に淋しう見える處もあつた、私はそれを見て、嗚呼この家にも老人があつたであらう、この屋敷にも妻子子供があつたであらう、いつの世にかは酒の香りもしたであらう、笑ひ聲も聞えたであらう、それが今は草葬生ひ茂つて、狐や狸の住居と變つた、眞に嘆はしい事、眞に悲しい恐しい事、これを思うと我衣手は露に濡れつゝぢやと思つて、そゝろに袖を濡らしたこともあつた、國に罪人の絶えぬのはお上仁政の至らぬので、田地田畑に荒の見えるのは、百姓の心が至らぬのぢや、仁政治く四海に布かるれば、惡人自ら影を潛め、百姓の心隈もなく作物に注げば、收入は自然藏に滿つる、お前方このお歌の心をよく味はうて、我衣手に露のかゝらぬ工夫せねばならぬ、これやがてお上への御奉公、これやがて先祖への孝行、延ては又子孫繁昌の基ぢや」

是にて秋の田の講義は終りぬ、並み居る人々は手を引きて、暗黑地より明明皓々地へ導き出さるゝが如く一種の感に打たれたりき、尊德は滋茶に咽喉を潤ほしつゝ

「序に我教の何たるかを云ひ聞けやう、我教へは德を以て德に報ゆるの道ぢや、一口に德とは云うが、第一には天地の德、君の德、親の德、祖先の德、と蒙る處極めて大きい、それに報いるに我の德行を以てするのぢや、君の恩には忠、親の恩には孝、天地の恩には仁義を以て報ふ、これを德行と云ふ、お前達も生を人間に享けたからは、如何にしてなりとも德を全うして、天地の恩に報いたいと思うであらう、此心は誰の胸にも必然ある、もし人間にして此心の無い者あれば、それは禽獸ぢや、禽獸は私の教へに預からぬ」

「御有理でござります」

我知らず叫びて、はつと顏を紅めたる人もありき、詞の外に溢れ出る誠に打たれて、感涙を溢す者さへありき、尊德は烱々と光る目に一同をすらりと見て

「すると次に起る疑ひは、その德行を何うして立てるかといふに歸するが、家を作るにはまづ心となるべき大黑柱を建てると同じで、德行を全うするにも、まづそれの心となる柱を定めねばならぬ、其柱は他でも無い」と一段聲

を高うして「天祿の分を明かにして、嚴にそれを守るに在るのぢや、貧富は暫く云はぬ、假にも一家の主人となれば、必ず多少の分限がある、由つてまづそれを調べる、中に金持の息子どもは、自分の家の身代が幾許あるかを知らぬ者がある、言語同斷、左樣な事で一身一家を修める事が能きるか、一身一家を修め得ぬ者が、どうして德行を全うすることが能きやう、假へば私の家株を田一町畑二町とする、これから上る作益を年分に百兩と積る、その內から借金の利子と年貢米とを引き去り、さし引き後に何十何兩の金が殘る、これが卽ち私の身に付く一年の天祿ぢや、百姓の家はその他に取る物もなく、又その他に入る當もない、さて天祿の何十何兩、これを悉く費ひ果して、來年の雜用を來年の收入から支へるのは、全く天祿を空うするので、私の教へに無い事ぢや、天分を守つて德行を明かにするには、能きるだけの儉約を盡して、何程かの餘財を作らねばならぬ、これが私の道で又天の命ぢや、中には無い間から借金して、世間への義理音物を贈るものがある、恰度自分の肉を割いて、他人の食膳に上すやうなもの、天下これほどの愚者は無い、入る

ことを計つて、分限を定むれば、義理も禮義も悉く其中から遣て行かれる、萬々一それだけの餘裕がなければ、義理音物を贈らずとも事が濟む、吝嗇と笑ふ者あつても顧る要は無い、何に限らず、爲きるのを爲ぬのが禮義でなく道で無いと同じく、爲きるのを無理に行ふのも亦禮義でなく道で無い、これが德行を立る初めである。自分の分度立たぬ中は、從つて德行を立てることも能きぬ、よいか、分つたか」と尊德は例の如く幾度も念を押しぬ

「解りました、お蔭でよく御仕法が分りました」と一同は謹み云ふ、その中に下新田村の小八のみは膝を進めて

「人間の中で一番尊いものは何んでござります」と思ひ入りたるやうに問ふ

「善い事を尋ねる、こりや誰人も心掛けねば爲らぬ事ぢや」と尊德は頗笑みながら、「人間の生涯で最も尊ぶべきは天祿ぢや、故に武士は天祿の爲めに一命を擲つ、天下の政事も、神儒佛の敎も、要る所は衣食住の三を出でぬ、黎民餓ゑず寒へざるを王道とする、故に人と生れたものは謹んで天祿を守らねばならぬ、固く天祿を守る時は如何な場合にも艱難困窮する憂がない、早い

話が先年の飢饉凶歲でも、天下の人悉く常に天分を守つてあれば、斯程の難義はせぬ筈ぢや、日々の住居、衣服、食物は云ふに及ばず、下駄傘、鼻をかび紙迄でも皆な天祿の內の物ぢや、故に如何な微物といへども、おろそかにしてはならぬ、私の道は卽ち天祿の無いものに天祿を授けるにある、天祿の破れんとするを補ひ、天祿の衰へたるを盛んにするにある、お前達も折角私の前へ道を聞きに來たのぢやで、私の云ふことを十分に呑み込み、德義德行の人となつてくれねばならぬ、天祿を守れば德行が全うなる、德行が全うなれば自然に家が富み榮える、よいか、分つたか」

此日の講話はこれにて終りぬ、尊德は夕暮れ、沐浴せんとて湯殿へ入る、折柄問ひ來りしは宗兵衛なり、

(三)

「ちよと御意得まする、御當家に二宮尊德先生御滯在でござりますかな」

宗兵衛は草鞋も脫かず、門口に立ちて斯く問ひぬ、背後に菅の小笠の古び

たるを被りて、悄然と立ち居れるは孫右衛門と與右衛門なり、幸內は上り口へ立ち出で

「二の宮先生これに御在宿、あなた何れからお出でなされたな」

「私事相模國伊勢原宿の茶商加藤宗兵衛と申す者でござります、先生御仕法に預りたく、家內の兄川崎屋孫右衛門同道、態々これへ參上仕つてござります、お執次ぎ下されうなれば、有難き仕合に存じます」

「これは〳〵遠方をよくこそお入來、先生は只今御入浴中、お出ましを待てお取次ぎ申し上げます」

「先づ其へ掛けさせられ、甚う冷もござらうに」

幸內は宗兵衛が十里の道を遠しとせず、こゝに尊德を尋ね來りたる由を聞きて、慇懃に待遇しぬ、宗兵衛は後を見返り

「兄樣好い都合、まづお邪魔なされませ、二宮先生之れに御在宿とござりまするが、只今は御入浴中、お出ましなさせらるゝを待つて、私共參りの事、お取り次ぎ下だされうとある、誠に御心切の御意、仇恩かにはなりませぬ、

疾う此へ來て當家御主人に御挨拶なされませ」

彼は尊德の袖に縋りて一家の荒廢を援ひ憤懣、遺恨、悪の氣を以て滿たされたる孫右衛門の心を慰め、最愛の妻の寶家をして、再び春風駘蕩の中に繁昌せしめんと願へるなりき、されど孫右衛門は尙ほ宗兵衛の云ふ所を信ぜざりき、宗兵衛の云ふ所を信ぜぬと共に、尊德の大慈悲心をも眞とせざりき、故に只義理一遍の如く腰を屈めて

「大きに有り難うございます、此の夕暮に御雜作をかけて濟みませぬ」と、門口に立ちたる儘なり

幸內は手づから熱き茶を酌みて上り口近く持ち出で來り

「皆樣是へお掛けなされませ、外は寒い風が吹きます、お身體に障ることあつては爲りませぬ、是へ澁い茶、眞心のみは厚う汲んでござります、先づ一つ召し上つてはどうござりまする喃」

「御芳志有り難う御座ります、兄樣、與右衛門樣これへござつて、お茶の御馳走をお受けなされては何う御座ります」

「いや、もう」と、與右衛門は次第に暮れ行く暗の中に包まれながら

「お柿ひ下されますな、私は酒が好きで御座ります、酒を頂いても禮、茶を戴いても禮、同じ禮を云ふなら、酒で禮が云ひたいので御座ります」

傍若無人の口上、傍若無人の有樣、宗兵衛は幸内に對して氣の毒、來合せ居る多くの村人に對して面目無く、額より流れ出づる脂汗を拭ひ乍ら茶碗を取り上げ

「こりや好い香り、御芳情淡かに頂戴致します」

尊德の耳は敏なりき、湯殿の中に垢を流しつゝ、聞くともなく、此の話聲を聞きぬ、思ひ掛けず、宗兵衛の孫右衛門を伴ひ來りしは、彼まだ十分に前非を後悔する所なきが爲めならん、前刻より耳を澄まして聞くに彼の聲は恨みと憤りとに慄ひ、我慾と偏執とに濁りて響きぬ、彼は人間にして惡魔なり、惡魔を導いて人間の道を踏ませるは容易の事にあるまじく、今の我には爲し難きことなり、宗兵衛の心は憐むべきも、十萬石御領内の興復に身を委ね、此地繁昌の仕法を引受け居れる我身、孫右衛門の心の療治に手は屆かず、慈

ひ宗兵衛に對面せば、何かと煩厭き關係をも生ずべし、仕法の中途に惡魔の叫びを聞くも心苦し、密に此處より逃げ出て、今宵は何處にても宿を求めん、我に人間を援う道ありて、惡魔を導く手を持たず、三十六計逃げるに手無しと古人も敎へ給ふ、さなり〳〵出し拔いて姿を潛し呉れん

尊德は斯く思ひ決めて、そと風呂を出でぬ、彼は手織木綿の布子一重を纏ひたるのみなりき、羽織も袴も、乃至は腰の物も奥の間に殘し置きたれど、それを取り來るべき餘地は無かりき、彼は寒さも厭はざりき、寒さを凌ぐ苦痛は、彼に取りて孫右衛門の惡心に對する百萬分の一にだも足らざりき

彼はそのまゝ裏口より潛び出でゝ狹き野道を的もなく走りぬ

時は冬の半、凍るが如き月一輪、足柄山の頂きに懸りて、枯葉を吹く風の音蕭颯たり、此處彼處に立てる稻村は黑く人の如く、ちよろ〳〵流れる山川の水は白く布を晒したる如くうねりて、遠く森の彼處に走る、滿目荒涼候えたる野狐の聲、何處ともなく物凄く聞える間を、尊德は直走りに走りたりき、彼は一圖に孫右衛門を恐るゝ餘り、只獨り知音の家を探りつゝ駈け行くなり

き

土橋幾個、野道何丁、暗き森三つ五つも通り抜けて、漸く到り着きしは家數百軒餘りもあるべき下新田村なりき、此村へは二三度も巡回に來りたることありて熟く知る、村の膳煎小八の家は瑯塔巍然として、すぐ其處の樹蔭に見えぬ、尊德は佛の住居を認め得たる如く歡びぬ、今夜の宿を賴むべきは其處なり、先此家の前に立ちてホト〳〵と戸をたゝく「賴む〳〵小八は居るか」

內には女房らしき女の聲にて

「何人で御座ります、小八は今日竹松村の庄屋殿へ報德の話聞きに行た儘未だ歸りませぬ、御用なら明日でもお越しなされませ」と、取り合ふ樣なし

「其報德の主が此へ來た、小八も今に歸る、留守でも厭はぬ、密と隱匿うて呉れまいか」

「聞き馴れぬお聲、はて何人樣で御座りまする喃」

女房はつゝやく樣に言ひしが、無て門の戸を內より開きて、月明りに尊德の顏を見て

「貴方先生ではござりませぬか」

「わしぢや、急に賴まねばならぬことあつて此へ來た委細は小八歸宅の上物語る、兎も角も奧の座敷借用、大事ないか」

「何事かは存じませぬ、此寒空に、お羽織も召させられず、薄着のまゝお越し、之れには仔細ある事と、恐れ乍ら御推量申上まする、御存じの狹苦しき所なれど、お厭ひなくば何時までも御休息、先づ來らせられませ」とまめまめしく前に立ちぬ、尊德は嬉しげに後に從ふ

先づ行燈、續いて火鉢、續いて澁茶、主人は留守なれど女房の眞心手と足とに現はれて溫き狀況の如し

「先生此處へお出の事小八は知らでありと見えます、一走り呼びに遣はすで御座りませう」と言ひかけて立たんとするを、尊德は慌てゝ押し止め

「いや、わしが此へ忍び參つたこと當分誰へも沙汰なし、夫よりは茶漬を所望、燒鹽一品外のものは何にも要らぬ」

「さてはまだ御飯さへ召し上らぬでござりまするか、之れと準備の品はなけ

れど貰ひ合せの粟餅が御座ります、燒いて進ぜませうかな」

「粟餅とは重疊、元來の好物嬉しく頂戴、さらば燒いてたもるかの」

「委細心得断くお待ち下されませ」

女房は火爐の火を掻き起して、志の粟餅ふつくりと甘まかりき、尊德は舌皷を打ちて賞玩、七五三の膳部にも勝りたる馳走なりき

四

「先生々々」と尊德の風呂の長きに興を覺して幸內は戸の外より叫びかけぬ、されど內には答へなかりき

「甚う靜かぢや、どうなされたのであらうの」と幸內は訝げに頭を傾げながら「先生、もし先生、餘り長湯を遊ばしてはお毒でございます、丁度御夜食の準備も出來、村の衆も詰めかけ、伊勢原宿から宗兵衛どのもお越でございます、お浴衣にても差し上げませうか」

されど尙ほ尊德の答へはなくて、湯殿の內に恍惚と照る燈火の影暗かりき、幸內は愈々異しみ

「はて不思議、少しもお聲がせぬ、もしや……」と云ひかけて戸を開きて見れば、白き湯氣ひら〳〵と立ち登りて朦朧と霧の如く籠りし中に一穗の燈火空しく照るのみ、尊德は影も見えざりき

「こりや大變、扨て大變、先生のお姿が見えぬ、先生何處へお出でなされた、誰も知らぬか、心付いたものは無いか」

大音聲に呼び立てぬ、斯くと聞きたる家內、村人、宗兵衛、孫右衛門迄騷ぎ立ち、家の內外此處彼處探し見たれど姿見えず「お羽織、お袴、お腰の物皆座敷に置きある、それを捨て置き遠方へお越の筈あるまい、世間のお疲れ前栽でも散歩なさせらるゝのではないか、此の寒空それもあるまじうは思へど、念には念を入れて一度も二度も探し見よ」と幸內は狂氣の如く云ふ。此れに勵まされて人々は彼方此方に手分け、尊德の行方を探したれど知れざりき

「不思議な事があればあるもの、先刻お湯へお入りなされた、先生が何時の

間にかお姿が見えぬやうなつた、こりやどうしたものであらうの」と幸内は獅噛火鉢の前に坐りて、そこに並居る人々を見廻しぬ、一同は皆不審なり、日頃物堅き尊德が羽織も着ず、袴も着けず、主人は原より、來合せたる人々に一言も挨拶せず、忽然として姿を潛したまふこと、その意を得ず、これには深き仔細あらん、併し人間の智慧で忖り難きは先生のお心なり、何かお思召しに叶はぬことありて、不意にお姿をお隱しなされたるにてはあるまじきか、もし左もあらば大變なり、尋常一樣のお方とは遠ひて、御領主樣より遣はされたる仕法の神さま、御意に戻ることありては後難恐し、いかにしてもお詫び改めてお歸りを願ひ奉らねばなるまじ

幸内は心に深く思ひ惱みぬ、此中の一人は心配さうに言ひ出でぬ

「先生のお蔭で沈み切つた人氣も直り、明日が日食米もなく饑渴に迫つた家家に法が立ち、村一統が氣を揃へて家業に精を出さうと云ふ所、萬々一先生のお怒りに觸れては、佛作つて魂をお入れ下さらぬ樣なものぢや、一同眞心を以つてお詫び、再びお出でを願ふたら、御聞き入れない事もあるまい、今夜は寢ず、手を分けてお行方をお探し申すぢや」と云ひながら、幸内の顏を見て、「庄屋どの、どうぞざらうの」

「その他に思案はない、大變なことが湧いて來た」

「併しお待ちなされませや、昨日から今日にかけ、段々と報德のお物語りも爲させられお湯へお入りなさるまでは、至極御機嫌の體と見えた、それが俄のお腹立ち、私は一向飲み込まぬ」と小八は小首を傾けつゝ「皆さん、外に心當りはないか」

「私もそれを思はぬではないが、急に御機嫌の變つたこと、萬一仔細ありとすれば……」と幸内は上り框に腰掛け居たる宗兵衛に目をつけ

「お氣に入らぬ人でも來られたのではあるまいか」

「されば、のう」と居合せたる人々も又宗兵衛、孫右衛門に目を注けたり

宗兵衛は尊德が湯殿の中より、姿を隱したりと聞き、人々がその爲めに苦慮し煩悶し心配し、尊德の行方を探るべく右往左往するを見て、或は我が身が不躾に孫右衛門を伴ひ來りたるを怒らせたるにはあるまじきかとの懸念も

ありき

孫右衛門の一身救濟の事は、尊德の許可を受けたるにもあらず、こゝに彼を伴ひ來りたるは、原より私の一存なり、この仕方お氣に障りて、姿を隱したまひたるが眞ならば、我が輕卒の罪、幸內に對して濟まず、村人に對して澄まず、殊にその身の熱心に信仰しをれる報德の道に對して濟まじ

「もし〳〵」と宗兵衛は思はず聲かけ、「もし私どもが參つたのを御立腹なされたのではござりませぬか喃」

「貴方がさう被仰れば申しあげます」と幸內は思ひ切て

「實は私もその疑ひがないでもござりませぬ」

「それなれば氣の毒、皆樣に申譯がない、先生お出の所さへ知れて居れば、それへ參つて具々もお詫び、これへお出でを願ふ法もござります、然しお行方が知れへではそれも爲らず、あア困たことでござります」

此時まで孫右衛門は默して何事も云はざりき、宗兵衛は彼の事を生神の如く云へど、尊德とて人間なり、慾心もあるべく我執もあるべく、更に七情を備へてもあるべし、假へ多少は人々に優れたる所あらんも、さして云ふ程の人物にてもあるまじ、されど無利息にて血の出る如き金を貸すと云ふ、宗兵衛の物語眞實、果して貸しくれるものならば、借りぬが損、貸して呉れずばそれまで、何れになるとも此方の腹は痛まぬことなりと宗兵衛が執拗く云ふを、斷るに斷りかね、牛に引れて善光寺參りする心にて尋ね來りしなれば、原より尊德に重きを置く心なけれど、急に尊德の行方知れず爲りしと聞き、村の人々日輪の隱れませし如く焦り騷ぎて、中には涙さへ流すものあるを見、流石の孫右衛門心を動かし、不審を籠めたる目に幸內を見返りぬ「お庄屋樣へ伺ひますが、二宮尊德先生はどうしたお方でござります」

「どうしたお方とは、不思議なことをお尋ねぢやの、これへお出での宗兵衛どのは尊德先生直々の門人と申すではござりませぬか」

「宗兵衛は二宮先生門人、私の爲には、妹婿でござります、併し私はまだ先生にお目通り致したことでござりませぬ、先生のお話を親しう承はつたことでござりませぬ、宗兵衛は先生のことを、生き神さまのやうに申しますが、私ま

ださほどにも思ひませぬ、今日これへ參りましたは、評判の二宮先生、金札か鐵札か、見分るためでございます」

「この人は途方もないことを云ふ、金札も鐵札もあつたものぢやない、凡そ日本廣しといへど、渇れた井戸に水を與へ、荒れた畑に米麥の出來るやうして下さるは、尊德先生の外ございませぬ、尊德先生のお膝もとには飢饉もございませぬ、凶歳もございませぬ、惡人もなく、貧乏人もなく、不義不道のもの一人もございませぬ、それも其筈、貧乏人には無利息で金をお貸しになります、荒た田地田畑へは眞心のある鋤鍬をお入れになります、いかに才智權力ある人も、尊德先生お慈悲の前に、頭をさげぬものはございませぬ、豐年の年に飢饉の貯へをなされまする故、いかな不作にも、米麥の乏しくなる譯はございませぬ、尊德先生お出の所は、夏、冬、秋の差別なく溫い風が吹いて居ります、早い話が、此村を初め、その界隈の村々を見てもよく分ります、小田原十萬石の御領内は、先年來の不作につゞき、いやもどの村も〳〵、菜の葉の樣な青い顏をせぬ人もございませぬ、明日食ふ米も無て、草の根を

掘た者もございます、併し御領主樣の慈悲、御家老のお執成で、二宮先生お越の後は、さしも疲弊の村々に溫かい烟が立つて參つたのでございます、枯れかけた木の枝に花が咲いたでございます、軒端の雀も、田の畔の蛙も、野末になく狐狸まで、先生の御高德を稱へぬ者はございませぬ、それほど有り難いお方に對つて、金札か鐵札か試すなど、勿體ないことをお言ひなされます、先生お姿をお隱しなされたも、お前のやうな方がお出でなされたからでございます、宗兵衛どの此方飛んでもない方をお迎なされた喃」

幸内は恨み聲なりき

「さうおつしやつて下さると穴へも入りたい、恥をいはねば理が聞こえませぬが、私義兄を同道したのは、先生お袖に縋て、このねぢけた心を矯め正したい爲めでございます、併し先生のお心は鏡も同樣、此方の心が判然と映りまするで喃、風呂の中でお聞きなされても、忽ち夫と存じ、何時ともなくお姿をお隱しなされたは、如何にも明智、人間業では付ること能きませぬ、兄さまお分りになりましたか喃、先生は何も彼も御存じでございまするで喃」

孫右衛門は遂にわな〳〵と慄ひ出しぬ

「すると私が之れへ來たのをお察し、姿をお隱しなされたであらうかの」

「夫に相違ございませぬ」

「貴方、私望の叶はぬのは是非もございませぬ、それが爲め御當家の皆さま、村々のお方にも、御迷惑をかけては濟みませぬ」と宗兵衛は困却の額を撫で

「此まゝ引きとり、皆樣御迷惑をお除き申すが當然かも知れませぬが、それでは義理が立ちませぬ、貴方も改心、眞の人間にお爲りなされて、先生のお行方をお探しなさるが好いでございます、而して一心の眞を以て先生始め皆の衆へお詫を爲さるがよいでございます」

孫右衛門は感極つて泣き出しぬ、一座は水を打つたる如く靜なりき

(五)

尊德が人知れず、幸內の家を脫け出でゝ、小八の家に忍び居たることは、その夜更闌けて、小八が家に歸りたるによりて露顯しぬ

小八は夜の明くるを待ち難ねて、その由を幸內の許へ知らせ遣り、その身は恐る〳〵尊德の前に出でぬ

「先生お越しなされませ、昨夜は幸內どの湯殿より急にお姿が見えぬやうなりましたので、人々どれほど心配したかも知れませぬ、併し御無事のお面を見て、こんな嬉しいことはございませぬ」

尊德は例の如く二刻を熟睡の中に過して、今目を覺ましたる所なりき、にこ〳〵と笑ひながら

「そりや氣の毒であつたのう、私はお前達が心配するであらうと思ひながら、孫右衛門に遇うのが氣疎さ、一人でこれまで逃て來たのぢや、お前の不在中、殊の外雜作になつた」

「すると、孫右衛門どの、お嫌ひと見えます喃」

「孫右衛門は嫌ひで無い、孫右衛門の心が嫌ひぢや」

「併し宗兵衛どのは、先生御門人と申すことでございます」

「宗兵衛は人間ぢやが、孫右衛門は魔ぢや、宗兵衛は野菊、誰にも可愛がら

るゝが、孫右衛門は劔一寸飾つても手を突かれる」

「その孫右衛門どのも先生御高德に感じて、一生懸命にお行方を探して居ります、お會ひなされてはどうございます」

「いや〳〵彼は逢はれぬ、會うては仕法がお留守になる、それよりは御領主樣より頼まれた村々の興復、それの仕法が第一ぢやでの、今日は當村巡回外外も見廻り、夜は又村の衆呼び集め報德の話しやうと思ふ」

「毎度御苦勞でございます、それでは先生お會ひにならぬこと、宗兵衛どのにお知せ申してはどうございます」

「さほどにせずとも、魚の釣ぬ汀に立つて、いつまでも絲を垂れる馬鹿はない、人のことに構はず、お前はお前で一身の修養を專一に爲」

小八と物語の間、幸內は尊德が當家に宿り居れる旨の注進を得、折柄來合せたる村の人十數人を伴ひて、取るものも取り敢へず追ひ掛け來りぬ

尊德の居ます所、宛ら衆星の北辰に向ふが如く、それからそれへ聞き傳へ聞き知りて、暫時する間に小八の家の臺所、門前、瀨戸口其外忽ち人を以て

滿たされぬ

幸內は進み出で「委細の譯は小八より聞きました、何とも恐縮の至りでございます、併し孫右衛門どのは、先生お前へ罷出ぬ暇言、外々に宿借、御沙汰を待て居られます、すればお構ひはない筈、從來通り私かたへお歸りの儀を願ひまする」

「いや〳〵そのやうに彼方此方往來せずとも、此處で澤山、石の上に坐つても、報德の話は出來る、それ等のこと懸念致すな」

「ではございませうも、私方には萬般の用意、先生お越しのお座敷には熱い湯も沸き、温い座蒲團も敷いてございます」と幸內は强て云ひながら「當家には東道の用意も無く、先生御逗留迷惑に思ふこと無いとも限りませぬ」

「そりやお前の思ひ過しぢや、別に雜作を掛けるでも無ければ、小八が迷惑する筈も無い、例云ふ事ぢやが、衣服は寒を凌げば足り、食物は飢を凌ぐに止り、家屋は雨露を防げば可い、熱い湯が何に爲る、私は水で澤山ぢや」

「それでは當分、これに御逗留ございまするか」と幸內は又云ひしが「是非

も無い事、小八心を注けてたもれよ」

「冷たい仮にも、熱い心を籠めてさし上げまする」と小八は歎ばし氣に「先生三日でも御逗留下されば、私村の者へ大きい面をする事が能きます」

「眞心のある處は私の宿ぢや、それでは出掛けう、今日は何方へ參らうの」

尊德が座を起たんとする時、村人の一人は恐る〳〵膝行り出でゝ

「庄屋殿、又宗兵衛殿參られたさうぢや、いかにも氣の毒、ちよと先生へ執次いで下さるまいか」

「今も願うたが一向にお取上げなされぬ、要り今日は機會が惡い、切ては二三日お待ちなさるやう、密と云うてたもれいの」

「夫は如才無う云ふたれど、孫右衛門殿には年齒の行かぬ子供衆もある氣、三人伴れ立ち長逗留は爲難ねる、とてもお許可ないとあれば、一目お顏を拜びばかりで大事ない、切に肝煎頼むと云うて、おろ〳〵とお泣きなさる」

「困つたのう」

「強ても御對面は協はぬでござりませうかな」

「執拗う申してお叱りを受けうも知れぬが、念の爲め云うて見る」と幸內は奥の間へ向き直つて「只今お聞きの通りでござります」

「又參つたか、憎い奴ぢや」と尊德は一言に云ひ消し「對面は協はぬ、逐ひ返せ〳〵」

「お詞を返しては澄みませぬが、口の渴いた時は命に替へても、一杯の水が欲しいものでござります、宗兵衛殿御心中、私共が皆な推量、何ともお氣の毒で堪へませぬ、長うとは願ひませぬ、只一目お逢ひなされて下さりませぬか、是は村々の者一統、宗兵衛どのに爲り代つてお願ひ申すでござります」

幸內の背後に手を突いて、一生懸命に云ひ出るは小八なり、これと同時に黑山の如く詰め掛けたる村々の百姓は、齊く頭を下げたりき

「皆の衆お頼みとあれば、皆の衆に免じて對面、不心得の廉だけを諭して遣る、宗兵衛孫右衛門今一人は何とか云うたの」

「與右衛門殿ござります」と村人の一人は云ふ

「その三人これへ呼び上げて下さるぢや」

雲は排きぬ、月の光りは見えぬ、宗兵衛孫右衛門與右衛門の三人は、何うが如くに椽端より滕行り上る

（六）

「お身達何の爲めに來た、何の爲めに來て私の仕法の妨げする」

尊德は嚙み付く如くに云ふ、その聲破鐘の如くなりき、宗兵衛は椽の上に額をすり付け、孫右衛門與右衛門は平蜘蛛の如く平伏しぬ

「私は自分の用で參り居るので無いぞ、御領主樣仰せ付け、度々の御懇命辭ひに詞無く參つて、村々興復の道を盡し居る、お身達の事など、原より私の知らぬ事ぢや、速かに歸れ」

再び詞を勵して云ふ、眼の輝き、聲の鋭さ、幸內小八を初め間ごと〳〵に詰め居れる百姓共、驚き懼れて顏を盥ぐる者もなかりき、實に日頃は莞爾と愛嬌良く笑ひて、情無き禽獸も懷くほどに溫き色を見すれど、一たび怒りを發したる時は恐しきまでに相好變りて、吐く息焰の如く、猛り云ふ聲雷の如く激しく、誰とて一縮みに縮まぬはあらざりき、宗兵衛わな〳〵と傳び出せしが、一期の大事、此處を外しては義兄の心を助くべき機會あらざらん、御慍りの前にも義兄を思ふ眞心の通ぜぬ筈無く、先生を信ずる熱情の見えぬ事あるまじ

斯く思ひて眞蒼に爲りし顏を盥げぬ

「恐れながら申し上げまする、私義兄孫右衛門儀、災害一身に並び起つて、これと罪も無い身を三年の間禁錮されてござります」

「身から出た錆ぢや、誠の研で何故研がぬ」

「その間に家は燒かれ、家財家具殘る方無く、宿人足の手に强奪せられ、揚句の果に最愛の女房までを失うたでござります、緣に繫がる私、その樣を見るに見兼ぬ、先生お膝下へ駈け付け、後々のお救ひをお願ひ申し上げたことでござります、義兄が禁錮を免されて、娑婆の風に當ること能きたも、眞個先生のお蔭、私は申すに及ばず、妻も娘も御恩德に袖を濡らして居ります、此度は又不肖のお願ひ、御立腹とも推量、恐れ入つたる儀ではござりまするが、

今一度御教訓、義兄の手に一家興隆の歡びを握りまするやう、御教示を垂れ給はゝ、生々世々忘れ難い大恩でございます」と宗兵衛は涙を流すばかりに云ふ

「お前は左程に云ふ、然し孫右衛門はその半分も思うて居るまい、三分一も思うて居るまい」

「決して左樣ではございませぬ、先生お袖に縋つて、一家興復の歡びを見やうとすればこそ、私共々お膝下へ參つたでございます」

「いや〳〵」と尊德は頭を掉て「孫右衛門これへ參つたは、私に報德の道を聞く爲めで無くて、利息の出ぬ金を借りやう爲めぢや、それに違ひあるまい、尊德の心は果して鏡の如く明りき、彼は孫右衛門胸底の秘を睹ること、宛ら明鏡の物を映すが如くなりき、宗兵衛は餘りの恐しさに詞は無く平伏してあり

「孫右衛門はまだ自分の罪を知らぬ、自分の惡心を棚へ上げて、人を恨み慍る、自分は是、他人は非、自分は白く、他人は黑く、宿中の人々を仇敵の樣に思ふ、お前の妻は私の詞を用ひ、孫右衛門の爲めに衣服調度を賣代して、それを孫右衛門の家へさし出したと云うで無いか」

「御意にございます、妻は先生御主意を懸命に奉じたでございます」

「それに孫右衛門はその眞心を嬉しとも思はぬ、男兒に生れて婦人にだも如かぬ奴ぢや、我意ばかりが强くて他の詞を用ひず、他の力に由て己を利せんと謀る、まだ夫ばかりでは無い、さうした上では怨みに怨みを報いやうとする、一家長に斷絶、やがて一身の置場も無く、野山をさまよひ歩くで無くては、長夜の眠り覺める時もあるまい、道を聞く者では無い、伴れて歸れ〳〵」

「御意を背いて、恐れ入ります、なれど孫右衛門儀——」

「お前が如何やうに云うても、玉をもて石を撲てば玉が碎ける、私は身を捨てゝ諸人の憂苦を除かうとする、孫右衛門は非を飾つて他を苦めやうとする、私と孫右衛門とは玉と石ぢや、行ふ處東西南北する、速かに歸れ、歸つて孫右衛門一流滅亡の道を行ひ、私は村々安穩の仕法を爲る」

孫右衛門と與右衛門とは氷の如き寒風吹き荒び椽の上に平伏して、身動き

だもせず冷汗に脊を濕らしぬ、宗兵衛は徐に此方を振り向いて

「兄さま、與右衛門樣、先生のお詞をお聞きでございましたかな、斯樣の御立腹、斯樣のお詞、最早や致し方ございませぬ、此上は家へ歸つて眞心から悔悟、胸の底に蟠る穢い物洗ひ去り、一人前の人間になつて、再びお袖に縋る他ございませぬ」と恨ひが如き聲なりき

「私が惡かつた、宗兵衛殿私が惡かつた」と孫右衛門は顏だも擡げず、涙聲になり「只今のお言葉、犇々と胸に應へて、今にも咽喉を締められるかと悲しく感じた、ふつと悔心、先生お詞とあれば如何な事でも聞く、今一應お前からお願ひ申して下され、此まゝ家へ歸つては、二人の娘に會す顏がございぬよ」

「ようお云ひなされた、そのお心に間違はございぬ唷、心にも無い僞言を云うても、先生お心は明鋭と同じぢや」

「此胸を割つても見せたい、聊かも間違はぬ」

「與右衛門樣は何うでございます」

「私も同樣、以來は人を怨むこともせぬ」

「そのお詞に相違無くば、今一應お願ひ申して見まする」と宗兵衛は又尊德に膝を向けて「先生、これでもまだお慈悲のお詞はございませぬか」

(七)

尊德の顏には春風初めて吹き渡りぬ、春風吹きて谷間の氷解け初むるが如く美しき笑は溢れ來りぬ

「人は善を積むと、善を積まぬとに由つて、自然に吉凶禍福を生ずる、聖人の敎に疑ふ所は毫も無い、孫右衛門改心、私の敎を乞うといふに由つて一言を授くる、宗兵衛も聞け、與右衛門も聞け、私欲我利の心を去つて懸命に私の言ふことを聞け、孫右衛門の家は過る天明度の凶歲に高價の米粟を賣代して、莫大の富を得たものぢや、普通の人情から云うと、凶歲飢饉の時などには、苟にも分限者と云はれるほどの者、持合の米粟を安く賣て自分の利益よりはまづ土地の人の難難を救うを勤めとするが當然であるを、孫右衛門の先

祖は、他の難義に付け入つて莫大の利を收めた、孫右衛門が大磯の宿で指折の大身代と爲たは、そのお蔭ぢや、故に天これを惡ませられ、神又これを慍らせられる、今日の困難は全くその源を當時に發して居るぞよ、されば天運順環、孫右衛門の世に饑饉が來た、孫右衛門もし慈仁の心あらば、家の身代を擲つても、人々の難義困窮を救ふべきに、自分は遠く江戸に走つて、手代番頭どもに、高價の米を賣らする、それでは先祖の惡を償うにあらで、罪に罪を重ぬるのぢや、由つて天の憎みは愈々重なり、神の慍りは愈々募る、貧しくとも苦みを願う者は無いに、土地の人々食うに困ればとて、罪の報いも無い者の家に押しかけ、金子を强奪、家財を破却、罪に觸れるを歎んで爲る筈はないが、飢饉の爲めに命は迫る、家には食ふ米が一粒も無い、其處へお前の强欲を憎む心が加はつて遂に斯程の大事に及んだのぢや、惡事は土地の人達が爲ても、夫れをさせた根本はお前にある、夫れを何故と云へ、若しお前に一片の慈悲心あつて、假令一石の米麥でも、慈悲の爲めに施せば、鬼でも惡魔でも恩は知る、お前の家に亂暴狼籍する者あらう筈はない、仁慈の道は人の踏むべき正しい大道ぢや、お前が夫れに心付かず例もない災難を受けたのは、賊に是非もない事、禍福門無く只人の招く所と、昔は聖人も仰せられた、すれば罪はお前にあつて土地の人にはない、畢竟天や神やが土地の人の力を借りて、お前の家の財物を破却させ、更に猛火の力を藉つて餘財悉皆をお燒きなされたのぢや、お前が夫れを察せず、自分計りが善くて人計りが惡いやうに思ひ、此の上まだ土地の人に恨みを掛けて復讐をしやうと云ふ、何んとも情ないことでないか、然もお前は一人、相手は大勢、一代の力を盡しても此の恨みを晴す事はなるまい、假令時を得て望を遂ることあつても、今度お前に苦められた人の子や孫やが、後々又お前の子や孫を責め災難で其の恨みを報う時が有るかも知れぬ、すれば事の治まる時節もない、大磯一帶殺氣怨氣の中に疲せる、お役人衆がお前を牢へお入れなされたも、お前をお憎しみなさる爲めではなく、お前の心にその身の罪を悟らせやうとしてのお慈悲ぢや、すれば三年の禁錮はお前の身に此の上もない御恩でないか、夫れも察せず、お上の仕法を片手落ちなどゝ恨む、若し自分の畑に瓜を植ゑて、

其の瓜に實の生つたを惱るものがあれば、世間の人が夫れを見てなんと云はう、お前は恰度瓜の蔓に瓜の生るのを怒るやうな愚かものぢや、今は一圖に家の再興を求めて居るやうぢやが、一旦廢たれた家は、金の力でも出來ず、權威權勢ばかりでも出來ぬ、金や權勢で築いた家は直ぐ滅るが心で出來た家は堅く保つ、若しお前が自分の非を悟り、天を恐れ神を信じ一身を困窮の地に落し、他人の難義を救う心になれば、禍も幸ひとなり、貧乏も富貴となる、すれば一家は思ふ儘に再興される、その外に言ふことない、分つたら早く歸れ」と言ひ終りて尊德は平伏したる孫右衛門をきつと見詰めぬ、孫右衛門は慄える如き聲

「御教訓身に泌みて難有く承はります、此の上は先生のお袖に縋つて、先生のお道を守らうと心得ます、何卒御門人同樣に思し召して此上御教訓を下さりませ」と思ひ入りたる有樣なりき

「こりや面白い、お前美事私の弟子になるか」

「一心の誠を捧げて先生御門人になります」

「よしそれなれば聞く、お前の家は土地の人に破却せられ、金銀財寶殘る方なく奪ひ去られた上、餘財を悉皆燒かれたと云ふが、爾うか」

「誠に慘い目に遭うてございます」

「然し古うからの物持、未だ少々は殘り居るであらう」と心ありげに問ひ掛けぬ

(八)

「いかにもございます、燒跡の釘を拾ひましても五六十兩の金にはなります」と孫右衛門ははつきり云ふ

「悉皆集めて何れ程ある」

「先づ五百兩は有らうと心得ます」

「五百兩あれば大金ぢや、併し夫を家に置いてはならぬ、お前の家に置く時は一兩の金も禍の種になる」

「へい」と孫右衛門は頼く言葉なし

「お前の家が何う云ふ譯で今度の災難に遇うたと思ふ、畢竟家に金銀財物があつたからぢや、すればお前の家に在つたものは、悉く災難の種と云はねばならぬ」

「大きに左樣でございます」

「若しお前に五百兩の殘金を自分の物とする心あらば、今度の災難が二度遣つて來るぞ、一文でも在來の金を殘すは恰度禍の種を殘し置くやうな物、その五百兩はお前の家の病毒ぢや、速かに捨てゝ仕舞へ」

「へい」と孫右衛門は不平の聲

「夫を爲ねばお前の家は滅亡する、私の敎を守ると云うても、其の心が直ぐ覆へる、何うぢや一文も殘らずその金を捨てゝ了うか」

孫右衛門は原より宗兵衛、與右衛門答ふる所もなく顏を見合せぬ、彼等は燒跡を駈け集めたる五百兩の金子にて、一家興復の見込を付ける事ならねば、尊德の手より無利息の金を借り受け、それを資本に一家繁昌の基を定めんとして來りき、尊德に惡魔惡鬼と罵れながら尙其の袖に縋りて一言の敎を求めんとしたるも、尊德の手より報德金の融通を願ふべき心あればなりき、然も尊德は孫右衛門、災害の慘狀を聞きて、一文の金を貸さんとは云はず、却て今の命と賴み思ふ五百兩の金子を投げ捨てよと命じたり、五百兩の金は孫右衛門の禍根病毒となる物なれば、それを悉く捨つるにあらずば、一家再興の道あるまじとまで喝破しぬ

誠に思ひ掛けぬ事、誠に意外の言葉、何と答ふべきやうもなくて、孫右衛門は心に疑惑の雲を釀しぬ、與右衛門も同樣、暫時は無言なり

「何うぢや宗兵衛孫右衛門、與右衛門二人の者は、此返答を爲難ねても、お前は私の門人、報德の道も聞いてゐる、何とか取り捌いた返答をする筈ぢや、何とある」

「お言葉までではなく、私義兄の心を矯め正したい許りに、先生のお膝下へ參つたのでございます、それ故先生のお言葉は善惡に拘はらず用ひさせる存念では居りまするが、是には義兄の考もあらうと察します、由て一應は義兄の心も聞き其上で御返答申し上げる事に致します」

「いや〳〵孫右衛門の心を聞くまではない、私の教へは君子の踐む道、小人の忌む所ぢや、お前方は目前の損益得失を念として遂きを慮る心がない故、とても君子の道を行うことは出來難からう、夫よりは速に歸つて今迄爲馴れた不道を行うが便宜であらう、世の中に出來ぬことを爲やうと思つて苦勞するほど馬鹿はない、歸れ〳〵」

「先生々々」と孫右衛門は絞り出したる聲にて呼びかけ

「數ならぬ私共不愍と思し召して、數々御教訓を下し置かれました、以前の孫右衛門ならばその有難い御教訓耳にも入りませぬ、なれど只今にては眞底より改心、先生のお袖に縋つて一人前の人間になりたいと心懸け居ります、されば如何なことでも御聞き申すが道、五百兩の金子取り捨てよと仰あれば、お言葉に從ひます、然しこの金子何處に捨てたものでございませう哺」

「うむ」と尊德は頷いて

「お前見事其金を捨てると云うか」

「只今のお言葉身に滲みて尊く、何ともして禍の根を絶たうと心得ます、由て只今私の手にある金子五百兩、お言葉通り捨てるでございます」

「健意な心ぢや、夫なれば話せる、五百兩の金子は天下の寶、海や川へ捨てよとは言はぬ、お前の家を破壞した土地の人はお前の仇で無うて、お前の恩人、先刻も云ふ通り、今度の災難はお前の先祖が數十年前に積で置いた不善の報いが循環つて來たのぢや、すれば誰を恨むこともない、土地の人がお前に辛い目を見せたゝめ、お前が善心に立ち返て、子孫繁昌の基を作れば、災難は道に入る初めぢや、一心を改めた證據に、五百兩の金を宿内に差し出すぢや」

「へえ」と孫右衛門は濁りたる返事

「すると五百兩の金子を仇敵同樣の宿役人に差し出すのでございまするか」

「如何にも爾うぢや、さうして宿役人の前へ出て、扨て今に爲て斯樣な事を云ふもちと遲いが、先年非常の飢饉救濟の砌り、土地の者は土地の者で互に扱ひ會うが人情ともある所、私不心得、皆樣に對して高價に米を賣らうとした、罪科免るゝ處も無い、夫が爲め皆樣へも御苦勞掛け、御役人衆にも御手

數を掛け奉る、前非後悔お詫び旁々金子調達、宿内難澁の人達へ少々の物にてもお惠み申したいと存じまするが、御存じの通り一家は破却、其上火災に罹りたれば手許に殘るものとては、此の五百兩だけでございます、眞の九牛の一毛なれど、私志、宿中貧苦の人々へ御分配を願ますと斯う云ふぢや、勿論尠しも惜しい心あつてはならぬ、又人を恨む心あつてはならぬ、能くするか」

「何事もお言葉に背くことは致しませぬ、五百兩の金子耳を揃へて宿役人の手へ差し出します、併し私着るに衣なく、食うに米なく、居るに家なき境界何として其後の露命を繋ぎ、二人の子供を養育したものでございませう哉」

「お前は船問屋を兼業、常々海上の往復もしたと云ふ、さすれば一二艘の船を所持せぬ事はあるまい」

「船はございます、未だ二三艘ございます」

「すればその利益で食て行かれる、一二艘の船を資本に艱難辛苦を事ともせず私の言葉に從て報德の道を行はゝ、土地の人も恨みを忘れて必ずお前を最負するに相違ない、若し又土地の人に夫れだけの情なく、其上お前を苦しめることあれば、其の時は私が捨て置かぬ、五百兩の金は勿論お前の家に商賣の立ち行くやう、私から金を貸して進ぜる、由てその邊の心配無用、思ふ儘に道を盡せ」

「有難うございます、夫を承はつて夢の覺めた樣でございます」と孫右衛門はほく〳〵悅び

「今より歸つて直ぐに金子を差し出すでございます」

與右衛門は孫右衛門の袖を引き

「お前それは眞實の事を云はつしやるか」

「えい、原より誠のこと、先生の敎へに從へば私の身も立ち、先祖の罪も消え、又家の暖簾を繼いで行く事も出來る譯でございます、態々此處へ參つたお蔭で心に懸る雲も晴れ、この樣にすか〳〵と好い心持になつたことはございませぬ」と愈々意外の言葉なりき

宗兵衛は孫右衛門が、思ひ掛けもなく改心したるを見て、涙を流すまでに

悅びぬ、畢竟これ尊德先生御高恩の致す所と幾度も手を合せて伏拜み伏拜み歸りぬ

眞に尊德の熱誠は惡魔を威服せしひべき力ありき、威服せしひるにはあらで心服せしむる力ありき、さしも怨氣に閉ぢられて、日の光りさへも見難ねたる孫右衛門が、尊德の一言に感じて三年來の意恨を忘れ、一文の錢をも二枚に殺きて使はんとする卑吝の心に、命と賴む五百兩の金を宿中貧民の救助に充てんといふに至る、夢にもあるまじき事、思うても見難き事、巨砲の落つる處いかな鐵壁も打ち碎かる、熱誠の迸る處いかな惡魔も降服せでやあるべき

斯くて孫右衛門は一時非常の善人となりぬ、後に尊德の敎へを奉ぜずなりて、再び貧困の淵に沈みたれど、一時は雲間を出づる月の如く淸き身となりぬ

この瞬間の善行をも、天は褒賞を忘りたまはざりき、孫右衛門が尊德の敎へに服して、報德慈善を行へる間に、去る方へ緣付きたるお重お末の二人の

娘は幸福なりき、孫右衛門は三五年の後、報德の道を捨てたるが爲め、地の底に埋め去らるゝ悲しき運命に逢着したれど、二人の娘は長く活きたる世界に働きたりき

英昭宣

復讐は人道にあらず

復讐を尊むは未だ理に盡さゞる者なり。東照公も敵國に生れ玉へるを以て父祖の讐を報ぜんとのみ願はれしな、西郷上人の說法に、復讐の志は小にして益なく、人道にあらざるの理を以てし、國を治め萬民を安ずるの道の天理にして大なるの道理を以てす。公始て此理に感じ、復讐の念を捨て、國を安んじ民を救ふの道に心力を盡されたり、是より大業成り、萬民塗炭の苦を免れたり。（公の訓言）

第四章

（一）

話題は後に戻りて、尊德初めて櫻町陣屋を出でし事情に移る、尊德が櫻町陣屋を出でしは、小田原公の命を奉して、小田原領內の飢饉荒凶を救はんとせしが爲めなり

尊德櫻町の陣屋を出でゝ、江戸へ旅立ちしたる由は、急飛脚に由て忠眞公に知らされぬ、折柄公は病の床に打伏し在したるが、尊德出府の事を聞かせて、直に家老辻七郎左衞門、吉野傳吉衞門、年寄三幣彈正、勘定奉行鵜飼三右衞門を枕頭に召させられぬ、折柄殿は增上寺前の上屋敷に在したりき

「二宮金次郎當所へ參るといふ、皆な聞いたであらう」

加賀守殿御面には衰への色見えさせぬ、淸々したる御眼は凹み、ふつくりと肥えさせし御頰の肉は落ちて、見るから苦しげに見えさする間より、尊德の事を物語らする御聲は朗かなり、七郎左衞門は恐る〳〵顏を擡げて

「今朝急飛脚、委細を聞いてございます」

「金次郎は今の世に得易からぬ者ぢや、櫻町四千石を昔の繁昌に復して、六ケ村の百姓を安堵の地に置いた、その手柄存じて居らう」

「百姓の出には珍らしい者と、我他皆な感じ入るでございます」

「今度は又小田原領内十一萬石の仕法を申し付けた、此度の出府、その爲と察しる」

「御意にございます」と七郎左衛門は直に答へて「御家中人の數は多くございまするが、口に說き躬に行うて、興隆同復の實を擧げる者は絕えてございませぬ」

「殊に金次郎は私の手許から一文の用費も取らぬ、初めて野州櫻町へ參つた時は、一家の財物悉くを賣代した、その眞心の籠つた金が、四千石同復の基礎に爲つて居る、國の爲め、家の爲め、二人とは無い手柄者ぢや」

七郎左衛門傳右衛門は云ふに及ばず、彈正三右衛門皆な顏を見合せて、殿の御意、他に忠良の家臣無きが如く云はするを、不平不滿に思ふ樣見えき、

加賀守殿は續けさせて

「功ある者に恩賞を與うるは當然ぢや、然し金次郎は私の遣す物を受けぬ」

「其儀も兼々聞き及んで居りまする」

「此度出府、望みても無き事ぢや、相當の恩賞を宛やうと存ずる」

「彼の頑固漢、有難く受けるでございませうか喃」

「受けずとも其分ぢや、金次郎に金次郎の道ある如く、加賀守には加賀守の道がある、勳功ある家人を賞するは天の道ぢや、お身達誠をもて金次郎恩賞の次第を協議爲」

「は」と四人の重役は口を揃へて云ひしが、後に續く詞も無く顏見合せて、暫時答うる者すら無かりき

「急かの御意、只今何れとも申し上げ難ねまする、恩賞の御沙汰は後々の範ともなる儀、十分詮義も致したう心得まする、由て一應詰所へ退つて、篤と相談、その上何れとも御返答申すやうの……」

七郎左衛門の云ひ掛るを熟くも聞かせず

「それには及ばぬ、白いを白いと云ひ、黑いを黑いといふに、誰點の打ち人もあるまい、手柄ある者を賞するは當然の道ぢや、これにて思ふ如に云へ、まづ七郎左衛門は何と思ふ」

「只今思案ござりませぬ、十年以來寢食を忘れるまで、一身を宇津樣御領内の興復に任じて、遂にその實を顯したは、武士が戰場に出入して、拔群の功を收めたるに比べまする、まづ百石ほど御遣はしござりませうか」

「知行は百石、さらば身分を何と定むる」

「勘定奉行の下役、それ等適當の格式と心得まする」

「而て傳右衛門は喃」

「辻殿御推舉、分に過ぎることござりませぬか」と傳右衛門はひと膝進めて

「金次郎一身を粉に碎いて、御分家樣御領内の仕法付けたとは申せど、高の知れた百姓の差配、海を埋め立て、山野を拓いて、新たに御領地を作つたとあれば兎も角、四千石收納の御領を、以前の四千石に致したと云ふに止まる、由て私存心は御知行五六十石、自分は今のまゝ、苗字帶刀を許さるゝだけで、

重疊の御高恩と察しまする」

「うむ」と加賀守殿は脇息に身を持たせつゝ「傳右衛門は輕う申す、而て彈正は何んと思慮する」

「私、吉野殿と同樣、さほどに重く御賞賜の要もあるまいと存じまする」

「お身は金次郎副役として、櫻町へも參りてあつた、その眼にも爾う見ゆるか」

「いかにも見えまする、金次郎他に優れた精力、他に優れた儉約、又他に優れた誠實の心を以て、土地興復、人民安堵の道を盡すでござりまするが、原より百姓の身を以て、百姓の行爲を致すに止まりまする、難義困窮に馴れた身を以て、艱難の道に處するに止まりまする、斯ほどの事共、重く御賞賜ござりましては、家中一統の思惑、他家、他藩の胡盧となる恐れもござりまする、由て吉野殿お說と同感、五十石お宛ひ、長く御家臣の列に加へ給はゞ、金次郎に對しては此上の御仁慈あるまいと心得まする」

「而て三右衛門所念は喃」

「恐れながら私は辻殿同説、十年の苦辛、何とも無きやうに申す譯もございませうが、人の爲し能はぬ事を爲遂げて、百姓を塗炭の苦みより救ひ出すは、容易ならぬ手柄、御知行は何れともあらせられ、身分は隨分お引き上げの儀、然るべう心得るでございます」

四人が四種の心なりき、然も一人として加賀守殿思し召しに近寄りたるはあらざりき

「爾う區々では困る、今一應談し合ひて、確とした處を取り決め」

されど四人は堅くその身所思を把り持ちて、互に一歩を讓る所なかりき、中にも彈正は尊德を快からず思ふ事あり、彼の立身出世を見るは何と無く面白からず癖む心もありて、加賀守殿御前も憚らず、鋭き尖頭を現はしつゝ、金次郎を惡ざまに云ひ卑すなり、されば一座の議論徒に沸騰りて、容易く決する所も無く、兎もすれば岐路にのみ入らんとする樣あるに、加賀守殿は凹みたる御眼を睜らせて

「皆な控へ、私は金次郎賞與の事を云ふのぢや、金次郎功勞の多少を議するで無い、殊に金次郎惡口を聞くので無い」とさも恐しき御聲なりき

四人ははつと平伏して、一時に口を噤みたれど、不平の氣はその息遣ひに見えたりき

「金次郎は誠の一字をもて生くる、利祿をもて生くる者でない、由て知行八十石、用人格を以て待つ、お身達も異論あるまい」

加賀守殿思し立たせ此の如し、流石の三觜彈正も非を打つ處なく畏まる

「金次郎到着とあらば、今の恩命を傳へぬ前、さし當る褒美として麻社祢一領を與うるぢや、此の使者――」とやゝ暫く考へさせて「三右衛門、其方爲」

鞠伺三右衛門は一議に及ばず承知の旨を答へ奉る、殿樣下されの麻社祢は、やがて加賀守殿御手して三右衛門へ御下げありき

この難しき相談の席果てたる時、執次の役人より、二宮金次郎着の披露はありき、三右衛門は下されの麻社祢を恭々しく携へて、金次郎の宿所を訪ふ、金次郎は長途の疲れも無く、夜の膳部を終りたる折柄なりき

（二）

「二宮殿今お着きか、さて御大儀でござつたの」と三右衛門は莞爾と笑ひながら云ふ

「先年來度々の恩命、特にも參上致す筈を、例の仕法忙しく思はずも延引、何とも恐れ入つた事、お上御病氣、御容體如何やうでございまする哉」

尊德は何を捨て置きて、まづ加賀守御容體を問ひ奉つる、三右衛門は聲を潜めて

「それが良い方ではござらぬぢやよ、御典醫の何れも方劑に脫漏無く、日々御見舞ひなさせられるが、一向驗が見えて參らぬ」と云ひ切て詞を改め「さて此度の上府、お上置かせられても、一方ならぬ御歎び、就て當座の御遣ひ物、この御社祢を下し置かるゝ」

床の間に置きたる白木三寶を取り上げて、恭々しく尊德の前に置きぬ、尊德の眼はぴかりと光る、同時に一膝ずつと進めて

「恐れながらこのお品、何でござるな」

「君侯よりの下され物、有難くお受けの爲」

「それは存じ、このお品、何であるかをお尋ねするのぢや」

「麻社祢ぢや」

「麻社祢――麻社祢とある、これをお上より下さるぢやの」

「格別の思し召し、有難くお受け召させ」

「何とも有難い、私如きを格別に思し召されて、麻社祢下し置かるゝ、御恩報い奉る道も無い」と彼の三寶を受け戴きしがやがて三右衛門の前に置きて

「然し、私には不用の品、謹んで返上仕る」

「や、返上と……」と三右衛門は詞急しく「殿樣御心に掛けさせての下され物、貴公御受けめされぬと……」

「殿樣思し召しとあらうも、身に取て用の無い禮服、お受け申す筈ござらぬ、謹んで返上、お取次ぎ願ひ存ずる」

「こりや意外」と三右衛門は息を機ませ「貴公元來何者ぢや」

「四肢五體缺くる所無き人でござる」

「いや、夫を聞くので無い、貴殿身分は何ぢやと問ふのぢや」

「生れは百姓、只今は御當家御家人格、御覽の通りの者でござる」

「御當家御家人格、貴公それを存じ居る喃」

「存じ居ればこそ是へ參つて、殿樣御用を承はる」と尊德は自若たり

尊德の自若たるだけ、三右衞門は急き込み

「さらば訊ぬる、この拜領物を什麼と心得る」

「麻社祢と仰せでないか」

「殿樣お古、この麻社祢に御手を通させてある、貴公の身上、格別に思し召せばこそ特に御垢付を下し置かれ、その海の如き御恩を思はず、謎んで返上など、存外の口上、家人として口に爲まじき言葉、今一言申し見よ、時宜に由らば其座は立たせぬ」と三右衞門は烈火の如し、尊德もし一言を過らば白電忽ちその頭の上に飛ばん

「や、何を云ふ」と尊德は勵聲一番、その聲大瀑の岩に碎けて鳴るが如く「我等家人の道を知らぬで無い、殿樣人君たる道を御辨へなさせられぬのぢや」

「言語同斷、まだ〳〵申す喃」

「お身は御當家勘定奉行を勤め居るで無いか、すれば十一萬石の御家人中でも、諸人の上に立つ者ぢや、些はその心得もあるべき筈、それの麻社祢であるを知る心に、今の時を何の時と存じて居る喃」

「……」

三右衞門は立て掛けし左の膝に、片肱載せて、小刀の鯉口を寬げながら、眼を皿にして尊德を佶と見る

「我等申すまでも無く、勘定奉行の要職に在る身ぢや、十一萬石の御領內に幾千萬人と數を知らぬ飢渴の民が、家にも道にも橫はつて居るで無いか、罪無くして餓ゑ死ぬ者が御領內の此處彼處に算を亂して居るで無いか」

「……」

「然も御領主樣御手に、これ等飢渴に迫る百姓町人を救はせたまふ手段なくて、態々私を櫻町からお呼び寄せなされたで無いか」

「……」

「然も一度二度で無い、私は櫻町四千石の百姓を塗炭の苦より救ひ出す大仕事を受け負うて居る、お家には屈竟の御家人も御在らせ、その中より人選、早々仕法御立てなさせられるやう申し上げたが、其方の外にこの大事仕遂げる者ありとも覺えぬ、早々歸國、片時も早く領内の百姓町人を飢渴の境より救ひ出せとの御諚に由て、是非もなく出府した、すれば私の到着するを待たせられて、救民慈悲の仕法ども御尋ね、百姓の飢渴救ふべき米粟にても御下げ渡しあらせられるかと思ひの外、御垢付の麻社祢を下されうとは、まこと案外、玉を受けうとして差し出した掌へ、炭團を載せられた心がする、斯樣な物拜領致し、寸々に引き裂き、御領内百姓に與へるとも、これで命を全うする事は爲るまい、謹んで返上と申したは此意味、私口上殘る處無くお執次ぎを願ひ存ずる」

三右衛門は立てたる膝を以前の如く折りて、理の當然に屈服したる吐息急なり

「貴公御辭退の意味、具く分つた、ぢやが此お社祢、百姓町人御救はせの料に下されたのでは無い、その邀心得違ひあつては爲らぬ」

「其儀承知致さぬでもない、なれど私これへ參つたは、御領内飢渴の民を救ふが目的、餘事一切に關るべき心はござらぬ、「平に……」と前にある三寶を押し遣りて「平に御辭退申し上げる」

「貴公は左樣に云ふが、殿樣御意はこのお社祢を慈悲の料に爲されうとの思し召で無い、貴公御領内を巡視の時、この禮服でも着用の要あるべきかと……」

「夫なれば尙の事御免を蒙る、御領内百姓町人の飢渴を救ふは、私身に取て容易の事とも覺えぬ、東西奔走、昼夜を分たず心を配つて、片時も救助の道に後れぬを念とせねば爲らぬ、時には洗足、時には草履、時には雨露に晒らされて、夜の山道を越ゆる時もある、萬々一拜領の御社祢を泥に穢すことあつてはと恐れ、この小き君恩を守る爲めに、肝腎の慈悲救恤を懈ることあつては、却て不忠と存ずるが故、これの拜領を不用と申した、この口上不

都合とあつて、御咎めを受くればそれまで、命惜しさに、不用の物戴くやうの事はせぬ、此儘返上、御使者御苦勞に存じ申す」

尊徳は再び何事も云はざりき、三右衛門今は返す詞も無く、彼の三貫を小脇に抱へて、是非も無く立ち歸る、後には盆梅一頻り香りを放つて、月の如く光る尊徳の眼のみ輝く

(三)

上使は再び來る、尊徳は淋しく照る燈火の下に端然と坐りて、小田原領内救恤の仕法など考へ居たりき

二度目の上使は用人郡文左衛門なりき、年齢はまだ若けれど分別は老せたる者なり

「加賀守樣御病氣は何うある哉」

尊徳は文左衛門の顏を見ると共に斯く問ひぬ、一念たゞ加賀守樣御身の上を思ふなり

「何とも御苦惱の御樣子に見えさせられる」と文左衛門は力なく云ふ

「御領内百姓は飢餓に迫り、御領主加賀守樣は大患に惱ませられる、御家人たる貴殿達、御苦勞一通りでござるまいの」

「然し二宮金次郎出府の事を聞かせて、今日は殊の外御安堵の樣に見えさせられる、早々御對面もあらする筈を、御病中とて御心に任せられぬ、由て拙者御名代に遣はせられた」

「お役目御苦勞に存ずる、而て御用の次第はな」

尊徳は例の單刀直入なり、餘事は捨て置き直にその思ふ所に進むが彼の慣用手段なりき

「外ではない殿樣御申付の事あるに由て、明朝早々評定所へ出頭致すやうとの御意ぢや」

されど尊徳は我が耳を信ぜざる如く問ひ返しぬ

「何と仰せられたな、今一應その御口上承はりたいと存ずる」

「更め仰せつけの次第あるに由て、明朝早々評定所へ御出頭なせられるやう

との御意でござる」

「その御口上相違ござらぬ哺」

「原より相違ない、殿樣直々の御意、拙者承はつて其儘をお傳へ申す」

「殿樣御意、一向に其意を得ませぬ、私不肖ながら御領内の窮民救濟のため、態々罷越したでございます、殿樣恙く在しませば、すぐ御目通り、私所存申し述べ、その足にて當地出發の心組みでございましたが、御病中御目通り叶はせられぬ旨の御沙汰もあつた、すれば外には用もなき身、片時も早く御領地へ參つて、お上御慈悲の旨を傳へたいと存じ居りまする、其處へ事々しうお呼び寄せ、何れほど重き御用あるでございませうな」と、尊德は以ての外の返答なりき

文左衛門は一膝よせ

「左樣に仰せられな、明日のお呼び出し、貴殿一身の處事、これはまだ内分ぢやが、御褒美御加增の御沙汰あらすろ哉に申す氣、さすれば貴殿御出世の光りも添ふ、誠に芽出度い事、四の五の仰せられるに及ばぬ、早速お受けの

御返答なさせられるがお爲めかと存じ申す」

「はゝ、さらば君侯思し召し、私に御褒美下されうとて、態々お呼び出しと見えまするな」と、尊德は苦々しく云ひしが「言語同斷、重ね〳〵その意を得ぬ、私殿樣のお頼み據なく櫻町陣屋を出て、御領内飢渴の民數萬人の救恤を致さう爲め是へ參つた、更め申すまではないが、私根が百姓、これと申す學問智慧も無ければ、數萬人の飢を助け、百姓町人に安堵の道を與へる事、容易の術にもあるまじく、先日以來それ許りを苦慮致し罷りある、然るに殿樣御意とは申せ、露命旦夕に迫る飢渴の民を捨て置き、御褒美の御知行を頂戴せんこと私一心に恥ぢまする、私先祖へ恥ぢまする、假令殿樣の御意ございませうとも、此義は切に御辭退、評定所へは罷り出ませぬ、貴殿より味好うお取執し只管お願ひ申すでござる」と快刀亂麻を斷つ聲なり

「意外の事を承はる、殿樣格別の御沙汰を以て、御褒美御加增を給はらうとある、それにても評定所へお出向きはござらぬかな」

「如何にも參らぬ」

と、尊德は言ひ切りて嫣然々々と笑を含みながら

「併しその御知行、如何程下し置かれませう哺」

「其處までは分らぬ、殿樣深き思し召し、幾十石幾百石御加增相成るか聞きも及ばぬが、年來誠實御奉公、櫻町四千石興復の崩し見え、御分家宇津殿お家の基礎も定り、領內百姓安堵の旨を聞き及ばせて、殊の外御滿足の體にも見ゆる、されば尠くて五十石、多くて百石、格式は用人並、其邊間違ひはあるまいと推量致す哺」

「ほゝ、身分はさて措き、御褒美の御知行五十石か百石との仰せ、身分には過ぎても夫にては心行きませぬ、やはり御辭退、切て千石も下さりまするとの、又考へもござりまするがの」

「何んと仰せぢや」と文左衞門は眼を瞪つて「二宮氏何んと仰せぢや、貴公今知行御加增二つながら望みでないと、立派に仰せられたではないか、その御口も乾かぬに、千石の御加增御所望とは、我等とんとその意を得ぬ、御狂氣か、それともお逆上か、お氣をお鎭めなされ、冷水でも參らせうか」

「いや〳〵狂氣も致さぬ、病氣にも罹りませぬ、私千石の御知行を所望致したは、夫に由て一身の榮華を計る爲めではござらぬ、切て千石の米でもあれば、二三千人の飢渴を援ふ事も能き、お上御慈悲のお心も現はれやうかと存じ付いての言葉、こりや水に流させられ、眞の拙者の望む所を申した迄ぢや」

「御戲言か」と、文左衞門は頰を膨らせ「それならばよいが、拙者は又眞心でお言ひかと驚き申した」

「戲言ではござらぬ、眞の所望、御加增御褒美何も要らぬが、只米と粟とは欲うござる、如何に赤心許り有つても米粟の準備なくては、飢ゑたるものを援う譯に參らぬで哺」

「矢張眞心にて申され、何の事かさつぱり分らぬ、要が明朝の御出頭、飽まで御辭退ござるぢやの」

大聲は俚耳に入らざりき、薪木をもて巨鐘の音を出すこと能はざりき、文左衞門は惘れ顏、その前に尊德は悠然たり

四

尊德の心は清き天を行き、文左衛門の心は低く地を匂うに由つて、その應答は宛ら聾の拳を打つ如く異樣なりき、尊德は煩厭氣に何事をか云はんとする時、執次の役人は間の襖を開けて

「二宮樣へ申し上げまする、只今お上御使者として吉村半之丞樣お越しなされてござります」

「又御上使か」と、尊德は思はず笑つて「今日は御上使の續け打ちや、兎も角も之へと申せ」

執次の役人は心得て去りぬ、文左衛門は不審の頭を傾けながら

「拙者上意を受けて參り、未だ何れとも御返答申し上げぬに、又々吉村半之丞上使として參つたと云ふ、急御用ども生いたかな、それとも返答延引を怒らせて、御催促の使者を下されたか喃」

尊德は再び文左衛門の間に耳を貸さゞりき、文左衛門は手持無沙汰に見え

しが

「まだ御返答を承はらぬ　明朝御召しの儀、いよ〳〵御辭退ござるかな」

「左樣な暇は持ち合さぬ、私只今申すこと、お上へ御披露下されて悶えない、再びお尋ね御無用にさせられ」

尊德の返答は火の如く明かに又谷川の水岩に碎けて鳴るが如く清しかりき、文左衛門は彼が君命とあるを物の數ともせず、思ふことを思ふ通りに云ふ潔き心に感じつゝ、言葉もなく息を吐くとき、第三の上使たる吉村半之丞は入り來りぬ、文左衛門は少し許り座を讓りて敷居側にひかへる、尊德は何時の場合にも自若たり

「二宮金次郎上意を傳へる」

と、半之丞はきつと云ふ、見れば年若き者なりき、繼社祢に淺黄紬の小袖鮫鞘の一刀を前半に佩したるが、姿凜々しく形整ひて年には似ず老せて見えたり、尊德は謹んで手を突く、半之丞重ねて

「文左衛門を以て沙汰致したる事、仔細あつて取り消し、今改めて申し付く

る仔細餘の義で無い、御領内に飢饉の風吹き荒み、萬民飢渴の境に落ちて、今日にも餓死しやうとする者さへある、是等難澁の者共お身ならで援ひ出す者有りとも覺えぬ、由て一切を委任、救恤安民の仕法申し付くる、其の準備として金千兩お手許より遣はさるゝ、これを持參、速かに小田原へ下向、百姓町人難澁の者を、勞り遣はせとの御下命御口上斯くの通りぢや、有難くお受け爲」

尊德は頭を垂れたるのみにて返答なかりき、半之丞は次の間より千兩箱一個を持ち出でゝ、重たげに床の間の上に置きぬ

「只今の御口上承知であらうの」

「御主意謹んで拜承、早速御領地に罷り下り、殿樣思し召しに由つて貧民救恤の仕法立るでござりませう」

と、尊德は重々しく口を開きぬ、今まで被りたる黑雲は晴れて、晴々したる顏、晴々したる聲、半之丞は頷き

「さらば御金子檢めて頂戴爲」

尊德は恭しく兩手を千兩箱に掛けぬ、床の間に生けたる寒菊の花香りて、黃金の露重げなり

「續いて御上意」と、半之丞は更に容を改め「只今御主意、殿樣直々御沙汰あるべき所、先月來の御病氣、御容體勝れさせ給はぬに由て、御對面は叶はず、やがて我等をして深き御主意を傳へさせらるゝぢや、小田原着の上はお米倉を開きて在合せの米粟を取り出し、夫を以て貧民救恤の助けとするも仔細ない、又金銀に不自由あらば、御金藏の扉を開いて其の內よりお金子を引き出すも隨意、總て其の方手心に委する、只飢渴の民を援ひ、村々仕法を立つる樣、深く御委任あらせられるぞ」

「委細承知仕る只今御沙汰身にとり何千石の御加增、何千言の御賞詞を蒙りたるにもまして難有き仕合に存じまする、私一度御領內に足を入れば、一心の誠をもて飢渴の民を援ふこと宛ら枯れたる田に水を灌ぐ如く仕るでござります、萬事御心配これ無きやう、貴殿より具に言上、御安堵の義御披露願ひ奉つるでござります」

「其の義は心得、具に君公へお傳へ申す、して何時御出立ちやな」

「明朝天の明くるを待ち直ちに出發、御領内に走せ參ずるでござります、御使者御苦勞、さらばこれにてお別れ申す」

尊德には一言無用の言葉なかりき、半之丞は得々として退き、文左衛門は其後より悄然として立ち上る

(五)

尊德は翌日夜の明け切らぬ間に江戸を立ちて、二十里半を一日の中に歩み、日の暮れ〳〵に小田原へ着きたりき、斯くして先づ領内の人情風俗、飢饉疲弊の狀態を視察して、救恤救濟の一般方略を定めたりき、しかもその疲弊は思ふに增して甚しく、その人情風俗は思ふに增して廢れ居たるに落膽しぬ、民の心に遊惰不德の心蔓るが如く、野にも山にも醜草彌が上に繁りて惠みの露は涸れ〳〵なりき、尊德は是等疲弊衰頽の有樣を見て徐ろに恢復興隆の策を回らしぬ、渴れたる池には水、飢たる人には糧、貧しき人の手には黃金を與ふる外、目前の救濟に施すべき道なきを知れる彼は、直ちに小田原に引き返して、御米藏の戸を開らかんことを請求し、續いて御金藏の鍵を與へられんことを申し出でぬ、加賀守殿出府不在中の政治萬端を所理盥梅するは家老の筆頭杉浦平太夫なりき、尊德の申し出でを聞くと齊しく、これ然しながらお家の一大事、我等一存にて決すべきやう無しとて、家老重役の面々を城中大廣間に呼び集めぬ、尊德申出に就てその可否を議るなりき、尊德は次の間に伺候す、平太夫は一座を見廻し

「只今金次郎申し出の次第、何んと沙汰し可からう哉」

と、思ひ決し難ねたるやうに云ふ

「太夫お詞よく分つてござる、金次郎骨折是も容易の事ではない、百姓救濟の爲めに心身を勞するはさることながら、御金藏を開いて金銀を取り出し、お米倉を開いて米粟を施與するは、輕々しく爲すべきことでもない、殊に金次郎へのみ御沙汰あつて、まだ我々へ御沙汰が無い、由て一應江戸表へ問ひ合せ、その返答承つて後、何れとも取計ふが至當ではござるまいか」